
空白の魔法

武者小路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空白の魔法

【Nコード】

N4533M

【作者名】

武者小路

【あらすじ】

無事に高校入学を果たした柏木正一。かしわぎしょういち

しかし、人見知りの性格が災いし、入学5日目にして友人は0。そんな正一の前に異世界への扉が開く。

扉を抜け、たどり着いた世界で正一は自らの体の異変に気付く。

0・記憶の未来

俺がいることで世界が、そこに暮らす人達が苦しんでいても、それは俺のせいじゃない。

俺がいなくなる事で世界が平和になっても、自らが感じることできない幸せなんて何の意味もない。

自分がいなくなってしまう以上、後世に幸せを残してあげるのかもしれないけれど、感じられない幸せよりはしっかりと感じられる不幸せの方が、今の俺にとっては嬉しいのだ。

まあ、つまりは

「……死にたくないんだよなあ」

呟く言葉は闇に吞まれるだけ。

俺は結局、最後まで抗うしかないのだ。

死にたくなければ殺すだけ。

他の解決方法がある事も、痛い程にわかっているけれど、相手が聞く耳を持たない以上、どうしようもない。

「よく頑張ったほうだよ……」

小さな声で愚痴をこぼすが、それで敵が止まる筈もなく、意識を集中させ、一度瞳を閉じる。

世界から切り離されたような、そんな錯覚に陥りながらも、ゆっくりと、確かに瞼を持ち上げた。

目の前には、数千の兵士が迫っていた。

1・異界の扉

ゲームの様な世界。

つまりは誰もが想像する様な、剣と魔法の世界に俺だって興味がないわけではない。

行ってみたいと思った事だってあるし、布団の中でそんな妄想をして、枕に顔をうずめた事だってある。

だけど、いくら空想の世界にのめり込んだところで、実際にそこに行ける訳ではない。

夢から覚めれば、辛い現実が目の前に転がっているのだ。

もはや恒例となつてしまった様に、退屈な授業を聞き流しながら、そんな考えを巡らせる。

昨日やったゲームのせいだろうか。

確かにあの世界はこちらよりも随分と魅力的だった様に思う。

「おい、柏木。余所見するな」

「……はい」

窓の向こうに広がる空を眺めながら、視線を動かさずに答える。

注意をした数学教師は俺の態度に不満がある様だったが、呆れた様にため息を吐くと、直ぐに授業を再開した。

少し悪いことをしたな。

どう考えたってこの状況、俺が悪いに決まっているのに。

幸い今は六時限目、あと少しぐらい真面目に授業を受けてもいいだろう。

教師の態度を見て、少しばかり改心した俺は窓から目線をそらし、前方の黒板を見つめた。

だが、人の人生はやる気を出したときにはもう手遅れだったり、その有り余るやる気をそぐ出来事が起こる様にできているのだ。今回も例に漏れず、そのようである。

「……はい、今日はここまで」

無情にも鳴り響く終業のチャイム。

とは言ってみたものの、内心は別にそこまでがっかりはしていない。やる気を出したのだから、単なる気まぐれなのだから。

ぼーっと数学教師を見ていると、入れ違いに担任の教師が入ってくる。

すると、生徒の帰りたいオーラを感じ取ったのか、必要最低限の連絡をただけで、担任は早々にホームルームを終了させた。

それは俺にとっても嬉しいことではあったけれど、友人と呼べる人がいない者にとっては帰りの道すら苦痛なのである。

寂しく帰り支度を整える俺に、話しかける人はいない。

かといって、自分から話しかける勇氣など持ち合わせていない俺は自然と、一人で帰るしかないのである。

荷物をまとめた鞆を背負い、教室を後にする。

廊下では皆、勉強という呪縛から解放たれ、級友、もしくは恋人との放課後を存分に満喫している。

それはもちろん、俺にとっては羨ましい光景であり、同時に異世界のように遠いものでもあった。

そんな騒々しさの中で階段を下り、一階の下駄箱へとたどり着く。

上履きから履き替えるために、履きなれた運動靴を取り出す。いつも通りの行動。

登校時と下校時に靴を履き替える瞬間、俺はいつも確かめる。靴の中、画鋲が入っていないか。靴の裏、ガムが張り付いていないか。

今時、そんな古典的なことをする奴がいるのかはわからないけれど、俺にとつてのいじめとはこれなのである。

かといって俺は今までの人生において、いじめられたことは一度もない。

じゃあ、なぜこんなにも警戒しているのかというと、俺は今、ついじめられてもおかしくない状況だ。

そう思っているからである。

今日もそういった理由から、運動靴の中をゆっくりと眺めた。異常なし　とはいかなかった。

「なんだこれ……？」

入っていたのは一枚の紙。

小さく折りたたまれたそれは、なんとも可愛らしい薄桃色をしていた。

いじめではないことは確かだ、むしろこれは

『ラブレター』

頭の中に浮かんだのは何ともうれしい、そんな言葉だった。

自然と綻ぶ口元を押さえ込みながら、ゆっくりと紙を広げる。

だが、そこに書かれていたのは期待していたようなものではなかつ

た。

『できるだけ人目につかないところに行ってください。早く！』

お世辞にも綺麗とは言えないような字で、書き殴られたそんな内容。

告白のための呼び出し、と取れなくもないけれどそれは少し無理がある。

第一、呼び出したとしたら場所が曖昧すぎる。

それに最後の一文。

そこから滲み出る必死さが、少しばかりの恐怖を煽った。

無視するべきなのか、それとも従うべきなのか。

普段の僕ならば、絶対に従うことなどせず、くしゃくしゃにしてゴミ箱に投げつけるだろう。

だけど、今の僕の心境としては従っておきたいというのが本音だった。

その理由は自分でも計り知ることができない。

ただと言う通りにしなければ何か大変なことが起こってしまう、そんな胸騒ぎがして止まないのだ。

もう結論は出た。

だとしたら、急がなくてはならないだろう。

運動靴をしっかりと履き、先ほどの紙をブレザーへと放り込む。

俺は人目につかない、適当な場所を求め、走り出していた。

十分ほど走っただろうか。

たどり着いたのは駅前の入り組んだ路地裏。

駅前の広場は今日も相変わらず人でごった返していたが、少し道をそれるだけで、人はぱったりといなくなる。しかしそれで、この後どうしたらいいのか？

「いやいや、まさか本当に来るとはね。恋文に偽装したのが効いたのかな？」

突如聞こえた背後からの声。

急いで振り向くと、そこには目を疑う様な人物が佇んでいた。いや、それを人物と形容していいのかはわからない。

何せそれには牛のような顔に角、尻尾、そして大きな翼、とても現実とは思えないようなものが盛りだくさんに装備されていたからだ。

「そりゃあ固まるよなあ。俺みたいに高貴で邪悪な生物、この世界にはいないもんなあ？」

そう、邪悪。

その一言で表すことができる、漆黒の翼をはためかせながら謎の生物は俺を嘲笑った。

「な、なんだよ……お前……？」

「悪魔、とでも言っておこうかな」

俺の問いに悪魔は即答する。

その薄ら笑いはこの世のものとは思えないほどに、邪悪で恐ろしか

った。

膝が震え、まともに歩けないまま後ずさることしかできない。

「まあ俺もさ、今回は失敗したくないんだよ。だから早く終わらせようぜ?」

一歩一歩、悪魔が近づく。

その度に膝の震えが増し、ついには後ずさることすらできなくなっていた。

腕をつかまれる。

死人のような冷ややかさに、俺の恐怖は限界へと達する。

そして悪魔がつぶやく謎の言葉が、子守唄のように俺の眠気を誘った。

「あばよ」

最後に視界に移ったのは悪魔の邪悪な笑みだった。

2・野獣の洗礼

夢を見ていた、という訳でもない。

ただ真つ暗な空間を当てもなく、流されるままに漂っているようなそれを夢と言ってしまうえばそれまでだけれど、どうもそうとは思えなかった。

もつと邪悪な、まるで悪魔に弄ばれているような……

悪魔？

そうだ、あの悪魔に出会って……

そして、どうなったんだ？

揺らぐ意識の中での自問自答。

答えが出るよりも先に、目の前が光に包まれた。

遠慮も何もなく、瞳へと降り注ぐ木漏れ日。

風にたなびく深緑の葉。

目の前にはそんな景色が広がっていた。

ゆっくりと上体を起こすと、首元を何かかくすぐる。

慌てて後ろを振り返るが、そこには緑の大地が続くばかりだった。

恐る恐る首元に手を当てる。

すると、柔らかい糸のようなものが指へと絡まった。

糸を絡めたまま、それを目視できる位置まで持ってくる。

髪の毛……？

吹き抜ける風に揺れる濃い栗色の糸。

それはどこからどう見ても、人間の髪の毛だった。

首元まであるその髪の毛は当然のごとく、俺の頭から生えている。だけど、おかしい。俺は髪の毛は長いほうではなかったし、色も純粹な黒だった。

「……どうして」

違和感を感じ、つぶやく言葉。

だけどその言葉自体が、どうしようもなく違和感の塊だった。

以前までの声変わりを経験した低い声ではなく、可愛い少女のような、とても愛らしい声色。

それが、俺の声帯から発せられているのだ。

幻聴だとか、そういった言い訳を許さないほどに、どうしようもない現実感を持って耳へと届く。

絶対に自分の声、そう認識せざるを得なかった。

「なんなんだよ、一体……」

だるそうな少女の声を聞き、苛立ちから頭を搔くが、その手触りさえ俺を現実へと引き戻す。

とても異常な災難が降りかかっているのは確か、なら今の状況を把握するのが、真っ先にやるべきことだろう。

ゆっくりと片足を持ち上げて、大地を踏みしめる。

体重をかけた右足は以前のものより一回り以上細く、どうにも頼りなかった。

そんな足を見て、より一層高まる不安をこらえながら、立ち上がる。比較対象がないながらも、分かってしまうほどに身長が縮んでい

た。

冷静さを失いそうな頭を振るい、自分の外見を隅々まで確かめる。先程まで気付かなかったのが不思議なくらいだが、俺は悪魔に会ったときのブレザー姿ではなく、白いローブのようなものを着用していた。

丈は膝の少し下辺りまであり、そこから下には細い色白の肌が覗いている。

腕のほうは手首まで長さがあり、頭の後ろにはフードが付いていた。

まるで魔法使いだな。

そう思いながら、無意識に両わき腹のポケットに手を突っ込む。

辺りを眺めていた視線を再び自分の体に戻すと、あることに気が付いた。

ゆったりとしたローブに隠された胸の辺り。

そこは男だった時とあまり変わらず、特別膨らんでいるといったこととはない。

「……セーフ」

一言呟き安堵するが、まだ安心というわけではない。

自分が今置かれている状況の確認、やりたくはないけれど、やらなくてはどのようなもないことだ。

そんな思いから恐る恐る、ゆっくりと自らの手を下腹部へと持っていく。

ローブの上からでも分かるように、そこにあるはずのものはすっかり消失してしまっていた。

「嘘だ、嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ……」

自分に言い聞かせるように呟きながら、意味もなく辺りをうろろする。

嘘だ。これが現実のはずがない。

あの変な悪魔に会った辺り、いや、今朝からの出来事は全て夢だったのだ。

そうとでも言わなければ、説明が付かない。

だけれど、吹き付ける風、降り注ぐ日差しは確かに現実のものだった。

一体これはどういうことなのか。

俺は女、それも多分少女になってしまったようだ。

性転換なんてそんな……

「漫画じゃ……あるまい……し」

驚愕を口にしながら、背後から聞こえた鳴き声に振り向く。

獣のような声を上げるのはやはり獣。

血走った目で涎をたらす、漆黒の狼がたたずんでいた。

一触即発。そんな言葉の通り、今にも飛びかかってきそうな前傾姿勢を維持し、こちらを睨む。

今まで見たことがないような、いや狼は見たことがないけれど、それしても大きな体躯に足がすくんで動けない。

悪魔のときと同じく、我ながら情けないものである。

今回は相手が明確な殺意を抱いているからこそ、一刻も早く逃げなくてはならないのに。

恐怖で震えながらも、狼の隙を探す。
すると突然、狼の頭部を小さな石が捉えた。

「早く逃げなさい！」

声がした方向を向くと、金色の長い髪をした女性が石を投げようとしていた。

呆然とした様子で俺がそれを眺めていると、女性は大声で逃げるように促す。

その声到我に返り、踵を返し走り出すが狼は女性に気を取られこちらを追ってはこない。

安心しながら前方を向くが、再び背後から女性の声が聞こえた。

「気をつけて！ 後ろよ！」

走る速度を保ったまま、恐る恐ると首を捻る。

そこには案の定、猛スピードで走る狼が迫っていた。

生い茂る草や立ち塞がる木の間を抜け、できる限りの速度で走り続ける。

しかし、二足歩行の人間が狼のスピードに敵うはずもなく、距離はどんどん縮まっていく。

もう駄目だとあきらめかけた瞬間、足がもつれ前方へと倒れこんだ。生い茂る草がクッションになり、衝撃は少ない。

けれど本当の脅威はすぐ後ろまで迫っていた。

唸るような鳴き声が聞こえ、振り返ると、今まさに狼が飛びかかる瞬間。

その後方には走りくる女性が見えたが、どう頑張っても間に合いは

しないだろう。

今度こそ本当にもう駄目だ。
俺は恐怖でまぶたを閉じた。

それからすぐに、右腕へと激痛が走った。

とつさに差し出した右腕は格好の餌食。

痛みに悶えながら目を開くと、鋭い牙がしっかりと食い込んでいた。

まるで自分のものではないような、それほどまでに痛烈な悲鳴が鼓膜へと突き刺さる。

腕に噛み付く狼の向こうで先ほどの女性が青ざめた顔をしていた。
その光景を最後に俺の意識は薄れていく。

「こんなん……ばっかりだな……」

意識は途切れた。

3・仮面の視線

ゆっくりと意識を取り戻すにつれて、思い出したかのように右腕の痛みが強くなる。

刺すような痛み顔に顔をゆがめながらも、いつの間にやら寝ていたベッドから上体を起こすと、そこは見たこともない小さな部屋だった。死んでいなかったということは喜ばしいことだけれど、一体ここはどこなのだろう。

と、そんな疑問を持った途端に、何やらたくさんの視線を受けていることに気付く。

その発信源はどうやら俺の足元のほうであった。

「目が覚めた？ 気分はどう？」

一人の女性の問いに、その周りが騒がしくなる。

女性の後ろにはたくさんの人たちが立っており、興味津々といった具合にこちらを眺めていた。

「あの、えーっと」

何とも突然の出来事に混乱し、口ごもる。

そんな俺の状態を察したのか、女性は背後の人だかりを部屋の外へと押し出していった。

後に残ったのは立派なひげを蓄え、杖をついた老人と、腰に剣を携えた屈強そうな男だけであった。程なくして老人が口を開く。

「傷は痛むかい？ お嬢ちゃん」

「えっと……はい、少し」

やっぱり俺は性転換してしまっているのだと、落胆する。

一方で俺の返答に満足したのか、老人は優しく微笑んだ。

「そうかい。まだ動かすことはできんじやろうが、回復魔法をかけたから安心なさい」

老人の言葉から察するに、この傷の治療をしてくれたのはこの人たちなのだろう。

だけど、回復魔法？ なんだそれは。

まるでファンタジーのような、そんな単語について問おうと思ったその時、老人の隣にたたずんでいた男が口を開いた。

「それで？ 魔法使いの嬢ちゃん。名前はなんていう？ どこから来たんだ？」

またしても、聞き慣れない言葉。

確かに俺は今、魔法使いのようなローブを身に纏っているけれど、いくらなんでもそれだけで本物の魔法使いだと思う人などいないであらう。

再び黙りこくる俺を男は怪訝そうな顔で眺める。

「どうした？」

「あー、えつとですね。名前ですか？ えーっと……」

正直に話してもいいが、鈍感な俺でも気付くほどに、この世界は俺がいた所とは違う場所なのだと思う。

無駄に混乱を招く必要はないのかもしれない。
だけれどこの問い、どうやって切り抜けたものだろうか。

「自分の名前ぐらい分かるだろう？」

沈黙する俺に苛つきを隠せない男は回答を急かす。
だけれど、正解と思われる答えが、俺の口から出ることはなかった。

「まあまあ。まだ病み上がりじゃろくに。そう急かすでない」

老人が制止すると、男はばつが悪そうに部屋を出て行った。
別に出て行くことはないだろうに、ずいぶんと繊細な人だ。
男の背中を見送り、閉まる扉を眺めていると、老人が口を開く。

「すまんのう。今はゆつくりと休むことが肝心じゃ。今日はここに泊まっていくと良い」

そう言い残すと老人も部屋を出て行ってしまった。
聞きたいことも聞けずに、嵐のように去っていった人たちを思い出
す。

そういえば、言葉は何不自由なく通じていたな。
異世界ならば、絶対に今まで使っていた言葉は通じないはずなのに。

そう考えてみると、ここは案外異世界などでは全くもってなく、今まで暮らしてきた世界と同じなのかもしれない。

そんなことを考えながら、ベッドの横、窓の外を見る。日没が近いのか、空は赤く染まっていた。

「いや、異世界だろうな。……残念ながら」

回復魔法や魔法使い。

そんなもの現実に存在するわけがないじゃないか。

頭の中の考えを打ち切り、俺はベッドで眠りについた。

それから目が覚めたのは恐らく翌日の朝。

時計がないから詳しくは分からないけれど、空を見る限りそれくらいだろう。

俺が寝ていた部屋には誰もおらず、特に昨日と変わっている様子もない。

痛む右腕をかばいながらベッドから立ち上がる。

昨日には気付かなかったが、俺の首には三角巾がかけられ、しっかりと右腕を固定していた。

回復魔法といっても、完璧に、一瞬にして治せるわけではないのだろうか？

そこら辺のことについても、今日はいろんな人に聞いてみよう。

魔法使いだと誤解されているけれど、そんなものすぐに解くことができるはずだ。

木製のドアに手を掛け、小さな部屋から外に出ると、温かい日差し

を全身に感じることができた。

その気持ちよさに身を委ねながら、しばらく上空を見上げていると、なにやら騒がしい声が聞こえてくる。

その発信源を辿ってみると、いくらかの木製の家が立ち並ぶその中心。

少し開けたような広場に何やら人だかりができていた。

時折、歓声のようなものが上がっているが、ここからでは何が起きているのかわかることはできない。

少し気になることはあるけれど、今はあの人だかりに突っ込んで行けるような状態ではないのだ。

「おや、おはよう」

不意に掛けられた声に振り向く、そこには昨日の老人の笑顔があった。

「おはようございます」

挨拶を返すと、老人はより一層優しい笑みになり、それに伴って俺の心も安堵に包まれる。

この人にいろいろ聞いてみるのが、やっぱり一番良いのかもしれない。

そう思って口を開こうとする。

しかし、その言葉を老人の声が遮った。

「悪いんじゃないが、わしはこれから出かけなくてはならん。お主の世

話は
「

広場の人だかりを睨むが、皆それどころではないようである。
少し困ったような顔をした後、老人はひらめいたように切り出した。
そして、村の奥の一軒家を指差す。

「あの家を訪ねなさい。男が一人住んでいるからの」

それだけ言うと老人は去っていつてしまった。

また聞きそびれた。

苦笑いしながら頭を掻くと、人だかりを横目に、目当ての家へと歩き出した。

その瞬間。

うごめく群集の隙間から、中心にいる人物が垣間見えた。

道化師。

不気味な仮面をかぶった道化師が、こちらを見つめていたような気がした。

4・下卑の襲来

生い茂る木々に囲まれた、木製の家。

ドアの前に立ちながら見上げると、それはどうやら二階建てのようだった。

背中越しに聞こえる騒がしさに、少しばかりの鬱陶しさを感じながら、頼りないドアを叩く。

しかし、返事はない。

出かけているのだろうか？

諦めて立ち去ろうとした時、頭上から声が響いた。

「どちら様か分かりませんが、勝手に入ってくださいーい」

やる気のない男性の声は、二階から聞こえてくる。

それにしても、あのお爺さん。

この家の人に俺が来ることを伝えていないのだろうか。

だけれどまあ、とりあえずはこの人に会ってみるしかない。

今の俺は右も左も分からない、赤ん坊と同じなのだから。

ドアノブへと手を掛けると、軋む音を上げながら扉は開いた。

鍵が掛かっていないのか、それ以前に鍵という概念がないのかは分からないけれど、とりあえず一安心だ。

一歩踏み出し家の中に入ると、埃が舞い鼻をくすぐる。

それを、小さな窓から差しす明かりが照らしている。

もう一つ照らすのは無数の本棚。

部屋の壁際の全てには、ぎっしりと本が詰め込まれた棚が並んでいた。

背表紙に見たこともない字が書かれたその本はよく見ると、辺りの床にも散乱している。

そんな本を踏まないように、慎重に奥の階段へと辿り着くと、二階から一人の男性が降りてきた。

「えーっと、どちら様かな？」

うつすらと無精ひげが生えたあごをいじりながら、男性は視線を向ける。

その瞳はとても優しく、たとえ早とちりだとしても人柄の良さを感じさせるのに十分なものだった。

「あ、あの……話は聞いていませんか？」

圧迫された空間で初対面の人と二人きり。

人見知りという性格が発動するのに打って付けの環境に、恐る恐る口を開くが、上手く舌が回らない。

しかしそんな様子に眉をひそめる事も無く、男性は少しの笑みを浮かべていた。

「いや、心当たりは無いけど。まあ、とりあえず上がりなさい」

優しい声でそう言うと、降りかけていた階段を引き返していく。

その後に続きながら、男性の後ろ姿を見ると、俺の頭より遙か上にそれが存在していることに気付いた。

上の段に立っているのだからという理由で片付けてしまえばそれまで、いや、そんな理由では片付けられないほどに、まるで小人にな

ってしまったかのような錯覚を感じてしまう。

別に前の姿の時だってそんなに大きくはなかったし、今だって巨人と小人なんて大袈裟な例えをするほどに差が広がっている訳ではないはずだ。

なのにどうしても、どんなに考えを消そうとしたって、どんなに目を背けようとしたって、例えば今のようになに誰かの後ろについて歩くとき、誰かとすれ違うような時にさえ、自分の変化を突きつけられてしまう。

「……あの」

急な感傷に浸るのは頭が冷静さを取り戻したからなのか、それとも振り返る優しい瞳のせいなのか。

それを考える気も無ければ、考える余裕も無い。

大好きなおかずを最後に残しておくように、今一番やりたくないことを先延ばしにしても、何の得も無ければ何の経験にもならない。後で押し掛かったときの重さは、痛いほどに分かっているつもりだから。

「鏡……ってありますか？」

男性が少し、怪訝な顔をした。

先に断りを入れておくとするなら、俺は別に前髪を気にしていたり、

化粧の崩れを懸念しているわけではない。

かといって、自分の顔を四六時中、二十四時間眺めていたいほどのナルシストなのかと言われれば、それもはっきりと否定することができる。

そもそもはその、髪の毛の様子だとか、自らの顔面だとかを確認したいのだ。

まあ結果として、たぶん化粧なんかはしていないだろうけれど、それ以上の、特殊メイクよりもさらに凄まじい変貌を遂げているだろう事は予想できる。

だけどそれと同時に、俺の予想なんかも簡単に上回るような変貌を遂げているだろう事も、予想できるのだった。

「つと……。これでいいのかな？」

目の前の男性の声から、鏡が俺の前に運ばれてきたことが分かる。

しかしまだ、自分の姿を確認することはしない。

人間誰しも心の準備というものが必要で、それを怠った場合は後々に大変なことになると思うから。

「何か魔術でも始めるのか？ 危険なものはやめてくれよ」

問いには答えず、ゆっくりと瞼への力を緩める。

その隙間から白い光が差し込み、次第に鮮明な景色へと変わっていく。

瞳へと飛び込む自分の姿。

低めの身長に小柄な体。

痛々しい三角巾。

首元まで伸びる、くせつ毛気味の濃い栗色の髪。
頭の上には

道化師^{ピエロ}。

「……っ！ 誰だお前は！」

響く声に振り返る暇など無く、すぐに視線が傾く。
倒れている。

そう気付くのにあまり時間は掛からなかった。
冷たい床へと倒れこみ、右腕へと走る激痛は意識を現実へと連れ戻す。

しかし、起こった出来事に脳がついていく事ができない。

「まあまあ、落ち着いてくださいな。旅の道化師……じゃ通用しませんかねえ？」

俺の頭上で口も動かさずにしゃべる道化師。
それは当然、奴は仮面を被っている。

不気味に笑う仮面は、さっき見たそれと同じものだった。

「ンハハハハ。そう怖がりなさんな」

子供のような、しかし残虐さを含む笑い声。

あまりの奇妙さにたまらず視線をそらすと、それに気付いたのか、
道化師は俺の耳元へと仮面の顔を近づけた。

「まっ、その顔もかわいいけどねえ」

5・魔術の憤慨

「ンハッ、後で殺してあげますからねえ」

手足を縛られた俺たちを嘲笑うように見下しながら、道化師は部屋の中を物色する。

もちろん、こんな状況になるまでに抵抗をしなかったわけではない。俺だって、溢れ出る恐怖を抑えながら奴に一矢報いてやろうと奮闘した。

けれどやっぱり、こんな小さな体でできる抵抗なんてたかが知れているわけで、おまけに怪我を負っている今となっては俺をあしらう事など、赤子の手をひねるように簡単なのだ。

「おい、お前は何が目的なんだ？」

こんな突然の事態にも冷静さを保ち続ける、この家の主。

まだ名前は聞いていなかったけれど、そんな彼だって抵抗をしなかったはずは無い。

見た目的にはとても強そうには思えない人だったけれど、こんな姿の俺よりは目の前の敵を打ち負かす可能性を秘めている。

そんな期待を寄せてみても、やっぱりというか案の定というか、日常的に人を殺していますといった具合の道化師にはあっさりとは言わないまでも、負けてしまったのである。

見たところ四十歳くらいだし、しょうがないのかもしれないけれど。

そんな男性の問いを無視しつつ、一つ一つ本棚から本を取り出し、眺めては床に投げ捨てていく道化師を横目に、隙を突いて両手両足を動かす。

縄を抜けるためのその行動も、何の意味も無く自分を苦しめるだけだった。

「いつてえ……」

固定されていることで和らいでいた痛みが、再び右腕を駆け巡る。激痛、とまではいかないが、じわじわと続く嫌な痛みだった

「大丈夫か？」

苦痛に歪む俺に気付き、男性は体を振り問いかける。

「まあ、なんとか……。あれ？」

少しばかりの強がりを含んだ言葉で返事をする、男性の手が俺の右腕へと差し出されていた。縛られていたんじゃないかっ

「静かにっ」

低く唸るような小声に、たまらず口をつぐむと、慌てて道化師のほうを見る。

気付かれたらやばい。

男性がどうやって縄から抜けたのかは分からないけれど、これは状況を一転させる大チャンスだ。

幸いにも道化師は目的を果たすことに必死のようで、こちらの声に

気付くことも無ければ、背中を向けてこちらの様子を見ることもできない。

驚きと緊張とが混ざった、居心地の悪さの中で男性を見つめる。考えなければ、ここから逃げ出す方法を。

思いつかなければ、皆が助かるような策を。

落ち着こうとすればするほどに、頭の中がこんがらがっていく。

「……あ」

自分以外には聞こえないほどに、小さな声で漏れ出す言葉。混乱する気持ちを溶かすように、男性の大きな手が頭の上に置かれていた。

と同時に、自由になる手足。

それはまるで、魔法のようだった。

「逃げろよ」

小さな声でそう言うと、男性はゆっくりと立ち上がる。真剣な瞳に捕らえるのは奇妙な道化師。

男性が走り、ピエロが振り向く。

そして俺が逃げ出すのはほぼ同時の出来事だった。

走る。

ただひたすらに走る。

右腕への痛みなんか気にしなくても良いほどに、ほかの場所が悲鳴を上げるほどに。

背後の騒音に後ろ髪を引かれながら、自分に言い聞かせるのはたった一つのことだった。

『俺ではどうしようもない』

だからこそ、もっと強い人や俺よりも力になってくれる人を連れてくるのが俺の役目だ。

その間に死んでしまったら？

手遅れになってしまったら？

余計な雑念に頭を振るい、のどかな村を駆け抜ける。

最初に出会ったのは昨日の屈強な男だった。

「どうしたんだ、嬢ちゃん？」

息を切らす俺に、不審な目を向ける。

女の子扱いされていることも、こんな緊迫した状況では気に障ることはない。

とにかく、余裕が無いのだ。

「と、とにかく早く来てください！」

左手で男の腕をつかみ、強引に引つ張る。
しかしその腕が動くことは無かった。

「一体なんだってんだ？　まずは理由を」

「早く！」

言うと同時に鳴り響く爆発音。

方角は真後ろ。

俺が逃げ出してきた家からだった。

「くっそ、あのじじいつ！」

男は何かに気付いた様に走り出す。

腰の剣を揺らしながら走る男に、付いていくことはできなかった。

全く、この体じゃあ体力まで落ちてるのかよ。

力なく地べたに座り込む。

もくもくと伸びる煙は遥か空まで上がっていた。

6・消炭の辞典

燃えていた。

少し近づいただけで熱気を感じ、命の危険を感じるほどに、真つ赤に燃え盛っていた。

音を立てて崩れる家の残骸に、ゆっくりと近づく。

「……嘘だろ」

この世界に来てから何度か口にした言葉を呟く。

嘘な訳は無い、今俺の前では見たことも無いような光景が、現実的に広がっているのだ。

火事なんて元の世界でも珍しいことでは無かったけれど、それに自分が巻き込まれたり、もっと言えば生で見たことだって無い。

物珍しさと少しの恐怖心で、燃える炎を見つめる。

だけど、そんな事よりももっと重要なことが、俺の心の中では渦巻いていた。

あの人は無事だろうか。

身を挺して俺を逃がしてくれた、いわゆる命の恩人。

「無事みたいだな」

心配は単なる杞憂に終わった。

呼びかけられて振り向くと、立っていたのは一人の男性だった。見紛う事無きあの人。

「はい。あの……大丈夫ですか」

目線を少し、男性の頭部へと向ける。

綺麗に切り揃えられた白髪の短髪は乱れ、赤黒い血に染まっていた。

「ああ、これかい？　大丈夫だよ、もう傷は塞がってるからね」

頭を抑えながら、少しの笑みを浮かべる。

いくら本人が大丈夫って言ったって、安心できるような血の量ではない。

それに頭なんて、下手すりゃ死んでしまうような場所じゃないか。

「本当に大丈夫」

「おい、じじい！　まだ話は終わってないぞ、一体なんでこんな事になってんだ！　早く説明しろ！」

言いかけて聞こえてきたのは俺が助けとして呼んできた男性の声。

怪我をしている男性に容赦なく詰め寄る様子は、見ていて気持ちがいいものではなかった。

「俺はまだじじいなんて呼ばれる歳じゃないんだけどなあ。それに説明ならさっきからしてるだろう？　突然変な道化」

「だからそれがおかしいんだって言ってるんだろ！」

ぼんやりと炎を見つめながら話を適当に聞き流す。

それにしても、この人は人の喋りを妨害するのが好きなんだろうか。最初に見たときはこんな人だとは思わなかったんだけど。

「いや、本当なんだよ。ほら、君からも何とか言ってくれよ」

話を振られても俺は答えようとはしない。

なんせ隣からは家が燃え、崩れる音が鳴り続けているのだから、このままで良いはずが無いだろう。

これ以上放置してしまえば、木々に囲まれているこの場所、いつ燃え移ってもおかしくない。

未だに燃え広がっていないのが、不思議なくらいなのだ。

「あの、それよりこれ！ 消さないと大変ですよ！」

どうやって消すか、なんていうのは原始的な方法しか思いつかないけれど、幸いにも騒ぎを聞きつけた人たちがそれなりに集まっているし、なんの役にも立たないなんて事は無いだろう。

「ほら、皆さん！ こういう時こそバケツリレーですよ！ バケツリレー！」

野次馬たちに向かってできるだけ大きな声を出す、表情を見る限り俺の言葉があまりピンときていない様だった。

バケツ、ないのか？

「あの、えーっとほら、とにかく水を」

我ながら情けないほど必死に呼びかけるが、誰一人動こうとしない。というか、こういう時って消そうとするのが普通じゃないのか？消防車だって無いだろうし、村の皆総出で事に当たるのが普通じゃないのか？

「バケツなんとかって言うのが何なのかは分からないけど、とりあえず、下がっててくれるかな」

動いたのは俺の命の恩人、たった一人だった。

喚く俺を片手で制し、燃え盛る炎へと一歩、また一歩と近づいていく。

一体何をしようというのだろうか、バケツリレーの先頭がやりたいとかそういう……いや、でもバケツリレーを知らないって言ってたし……。

的外れにも程がある考えを頭の隅に追いやり、言われたとおり数歩後ずさる。

男性は炎の直前で足を止めると、地べたに胡坐を掻き、座り込んでしまった。

何を始めるのか、そんな事を聞けるような雰囲気ではなかった。

「あつ………！」

崩れ落ちる家の上空、ちょうど真上の辺りから異変が始まる。

空間が捻じ曲がったように、光を屈折しながらうねり、混ざり合うそれはまるで大きな水槽のようだ。
しかし、周りの人間は決して歓声や感嘆の声をあげることはいない。
すでに見慣れたことであるという証だった。

「こんなもんかな？」

全ての仕事が終わった様に、男性が立ち上がる。

と同時に、揺れる空間は本物の水となり、辺りへ降り注いだ。

大きなバケツをぶちまけたような水流は瞬く間に炎を鎮火していく。

人生で始めてみる魔法。

それは意外にもあっけなく、呪文や魔方陣なんて必要としない、もはや完璧なる超常現象だった。

「ああ、真っ黒だ……。これはもう使い物にならないな」

湿った燃えカスの山の上で、男性が一つの本をつまむ。

表紙からかうじて本だと分かるその中身は、見るも無残に黒焦げになっていた。

「防火魔法、掛けといたのになあ」

7・不毛の口論

少しの苦笑いを浮かべながら男性がその本を振るうと、かるうじてとどめていた原形は崩れ、はらはらと土に返っていく。

魔法と呼ぶに相応しい現象を見た後だと、そんな仕草でさえもまるで仙人のように神秘的に思えた。

「しかし、これはやり過ぎだよなあ……」

そう呟きながら、すっかり火が収まった家の残骸を名残惜しそうに振り返りつつ、男性はこちらへと戻ってくる。

そういえば、この家はなぜ燃えてしまったのだろうか。

あの道化師が燃やした、それが一番妥当な気もするけれど、それならばそもそも目的はなんだったのだろうか。

あの魔法について問い詰めたい気持ちもあったけれど、今は身の安全を確認するのが一番だろう。

「……あの、すみません」

未だ変わり果てた我が家を見つめていた男性は、俺の呼びかけに振り返った。

「さっきのあいつ……あの道化師は何処へ行っただんですか？」

俺の問いを聞いた男性は隣にいる男に得意げな顔を向けた後、事の真相を話し出す。

「あっちの森に逃げてったよ。また襲って来るかもしれないから、警戒しておいたほうがいい」

そう、男に注意をする男性。

今思えば、俺が助けに呼んだ男は体格も頑丈そうだし、何しろ武器を持っている。

この村には自警団みたいなものがあるのかもしれない。しかし、そんな男は未だ納得していない様子だった。

「だからさっきから言ってるだろう？ お前が言う道化師は」

「私がどうかしましたかな？」

二人の会話に耳を傾けていた俺は背後から突如聞こえた声に、振り向くことができなかった。

先程の狂気染みた声色とは違い、今はむしろ相手に好印象を抱かせるような落ち着いた声だ。

だけど、裏の一面を知っているからこそ、それは恐怖をより一層高めるに過ぎない。

「お前はっ……………！」

そんな声の主を見た男性の表情が強張る。

それによって俺の疑いが確信へと変わり、振り返ろうとする足を止めてしまう。

そのまま動くことができなくなってしまった俺の頭に、ふいに誰か

の手が乗せられた。

位置関係からいってその人物は明らかであり、すぐに恐怖が心を支配する。

それを振り払うように、俺は勢いよく振り返った。

「おやおや、怖がらせてしまったかな？」

仮面をはずし、白い化粧が施された顔を晒しているものの、その服装にその身に纏う雰囲気、見間違えるはずもないあの道化師だった。普通異世界に来てこういうピンチに巻き込まれたら、秘めたる力が覚醒するものだと思うていたけれど、全く持ってそんな様子は無く、俺はただ震える足を必死に動かして後ずさることしかできない。傍から見ればそれはずいぶんと情けないものだと思うけれど、そんなことを気にしている余裕すら俺の心にはなかったのである。

「お前は何者なんだ？」

怯える俺と不気味な道化師の間に割って入った男性は先程までとは違う低めの、まるで敵を威嚇するかのような声で道化師に問いかけた。

そんな頼れる男性とは違い、横でただ傍観する腰に剣を携えた屈強な男。

こういうときこそ、その剣が役に立つときではないのかと目で訴えかけるが、男は俺の救援要請に全く気付くことなく、そもそも今日の前にいる危険人物をほんの一つも敵視していなかった。

「おい、じじい！ この人は旅の道化師さんだぞ？ 何突っかつ

てんだよ！」

そう言つて男性の非礼を詫びる男。

こいつがただの旅の道化師？

ならこの道化師は人を殺すために旅をしているのだろうか。

「いや、でもこいつはさつき俺とこの娘を縛つて殺そうとしたんだぞ？ それに家が燃えたのだからこいつの魔法のせいだ」

「何を物騒なこと言つてやがる。魔法だって？ この道化師さんのどこに魔道証が付いてるってんだ？」

まどうしよう。

何やら聞き慣れない言葉が出てきたけど、今はとてもその意味を問えるような雰囲気でも状況でもない。

片や道化師を擁護している人がいるとはいえ、俺と男性にとっては恐怖の対象でしかないのである。

下手に動けば殺されかねないのだから、気を緩めるわけにはいいかな。

「そんなことは幾らでも説明が付くだろう？ 魔法を犯罪に使うような輩がわざわざ魔道証を付けるとでも思っているのか？」

話に全く付いていけない俺は複雑な心境のままに耳を傾ける。
しかし次に飛び込んだのはあの道化師の声だった。

「なんと！ 私が罪人だとも言つのですか？ それは全くの見当

違いでございますよ。第一私は魔法が使えません。それに、彼の言う通り魔道証だって何処にも付けていないではありませんか」

道化師は犯罪者と呼ばれ、心底嫌そうな顔をしながら自らの罪を否定して見せた。

その清々しいまでの態度に事件の被害者でなければ、俺もすっかり騙されていただろう。

時折除く狂気でさえも、その衣装のせいだと誤魔化してしまうのである。

「あくまでとぼける気だな。お前みたいな奴が大人しく国に従うとは思えない。そう言っただろう？」

「それこそが外的れだということです。私は何より平穩を愛する者でしてね。自ら反逆なんてしません」

あくまで平靜を維持しながら肩を竦める道化師。

表情すら全く変わらないその姿は、もしかいつは俺たちを襲った道化師とは別人なんじゃないか、そして俺たちは全く無関係な人にとんでもない失礼を働いているのではないか、等と思わせてしまうほどの堂々とした態度だった。

「それに、反逆者といえば貴方の方ではありませんか？ 先程の技を見るに貴方は魔法使い、魔術師なのでしょう？ 魔道証を身に着けるのが決まりというものではないのですか？」

道化師の的を射たのであろう発言に男性が更なる反論を加えようとする。

しかし、その言葉は予想外の人物によって遮られることとなった。

「お前さん達！ 何の騒ぎじゃ？」

少しばかりの山菜などが入った籠を片手に、今朝会ったあの老人がこちらへ小走りに向かってくる。

その顔には驚きの表情が浮かんでいた。

8・悪意の長

おそらく今収穫してきたものであろう山菜を籠に詰め込み、中身が飛び出さんばかりに腕を振りながら近づくお爺さんに、村人と俺たちの視線が注がれる。

最初に口を開いたのはあの道化師だった。

「おやおや村長殿。そんなに慌てなさって一体どうしたのですかな？」

村長。

その見た目や振る舞いから、このお爺さんは村における偉い人なんじゃないかと思っていたけれど、その予想はぴったりと的中していたようである。

そんな村長さんは道化師の問いに、未だ慌てながらも必死に答えを返した。

「どうしたも何も、村から煙が上がっているから来てみれば、一体何なんだこれは！　こんな状況で落ち着いていられるか！」

その取り乱した姿を見た村人たちは傍観をやめ、村長を宥めにかかる。

そんな行動が功を奏したのか、村長は一度深く息を吐き出すと、今朝のような落ち着いた表情で村人たちの方を向いた。

「すまん、年甲斐もないことをしてしまったよ。ありがとう、もう落ち着いた。」

優しさにあふれた声で礼を言う村長。

しかしその視線が俺の真横にいる人に向けられたとき、まるで人が変わったかのように村長は至極真剣な表情になる。

そう、あの男性だ。

ついさっき魔法を使っ たあの男性。

「……これがどういうことか、ちゃんと説明してくれるかね？ コニー君」

コニーと呼ばれた男性はその言葉をしっかりと受け止め、村長の目を冷めた瞳で見つめ返していた。

「何って言われてもなあ、もう説明することなんかないんだよ。さつきから言ってる通りだ」

あれから案内された村長の家に、俺たち三人は座っていた。三人というのは俺、コニーさん、そして村長さんだ。

もう大分話し合いを続けているが、あの道化師は今もこの部屋にはいない。どう考えてもこの事件の首謀者であるあいつはどうかやら村長の疑いから外されているようである。

「お前さんの言うことを信じてやりたいのも山々なんだがな、わたしにはあの方を疑うことはできないだよ。古くからの親友に紹介された、信頼のおけるお方だからのう」

村長さんの少し苦しい言葉を聞きながら、俺は少し落ち着かない気持ちだった。

そりゃあ見知らぬ場所で見知らぬ人達と何か真面目な話し合いをしているのだから、緊張ぐらいして当然だけれど、理由はそれだけではない。

さつきからずっとこの部屋にいる人数以上の視線が俺たちに注がれているのだ。

村長さんはその発信源である俺とコニーさんの後ろ、窓の向こうを見ながら、呆れた様な表情を浮かべた。

その視線が何のものなのかについて俺は大体の見当をつけることができる。

大きな理由としては村長さんの後ろ側の壁、そこにも備え付けられている窓から、時折結構な数の人影が押し合うように揺らめいているのだ。

恐らく野次馬根性丸出しの村人達が、様子を見に来ているのだろう。そんな村人達を知ってか知らずか、コニーさんは先程までと同じ調子で話を進める。

「そりゃあ、爺さんの気持ちだってわかるさ。俺を信用できないっていうのもわかる。だけど待ってくれ」

そう言うと、今まで組んでいた両手を崩し、片方の手を隣にいる俺の頭へと乗せた。

「証人は俺だけじゃあないんだ。この子だってあいつに襲われた。目撃者が二人、ってのは大きいと思うぜ？」

ニヤリと笑うコニーさんを見て、村長はため息をつく。そして髭を弄りながら、見定める様な視線を俺へと向けた。

「お前さんを信用できないというのはもっともな話じゃ。残念ながら。だが、この娘さんだって信用はできないのじゃよ」

緊張をほぐすかのように、村長は背もたれに体重を預ける。そんな彼の発言に俺が疑問を抱くことはなかった。

「この村の奴じゃないから……か？」

俺はこの村の人間ではない。
むしろ、この世界の人間ですらないのだ。

村長にとっても、この世界にとっても、俺は突然湧いて出た存在だ。

「その通りじゃよ、コニー君。悪いが君も、そこのお嬢さんも、信

用することはできんのじゃ」

理屈は理解できる。

村長が俺を信用しないのは見ず知らずの人間だから。

ただど何故、ここにいるコニーさんのことを頑なに信じようとするのか。

彼はこの村の人の筈なのに。

「それを言われちゃあ、お終いだ。確かにこの子は村で見かけた事の無い人間だからな」

コニーさんも脱力したように、背もたれに寄りかかった。

「あーあ、こうやって正直者は馬鹿を見るんだ。せいぜいあの極悪人を信じてるがいいさ」

そう吐き捨てると、コニーさんは家を出て行こうとする。

それに伴ってざわめく村人達に、村長は呆れたようにため息をついた。

「待ちたまえ、コニー君」

村長の呼びかけに、再び影が揺らめく。

振り返ったコニーさんは無言で村長を見つめた。

「このお嬢さんは怪我をしておる。それが治るまで、お前さんに面

倒を見てもらおうと思って向かわせたのじゃが……。話は聞いておらんかの？」

そう言えばそんな話だった様な気がする。

だけど今思えば、何故コニーさんにそれを頼むのだろうか。

俺も所詮、歓迎されてはいない面倒事、という事なのだろう。

まあ治療をしてくれた上に、面倒を見てくれる。

本来は有り余る恩なんだけれど。

「聞く暇もなかったさ。変なピエロさんに殺されかけたんでね」

皮肉ったような言動に村長の表情が歪むが、それが言葉に現れる事はなかった。

「……まあ、いい。とにかくそういう事じゃ。後は任せるぞ」

村長の言葉を聞いたコニーさんはその場で口を開く。

「じゃあ、ほら。行くぞ」

「は、はい……」

俺はその声に立ち上がると、この場ではじめての言葉を発する。結局、信じてもらえなかった。

そんな悔しさと共に、俺とコニーさんは家を後にした。

9・馬車の出発

「あ、あの、家はさっき燃えちゃいましたよね……？」

コニーさんの家への道を戻りながら、先に行く背中に話しかける。その影はもうほとんど見えなくなり、見上げた空には夕日が沈みかかっていた。

俺が今日目覚めたのは朝ではなく、昼頃であつたのかもしれない。それとも、結構な長い時間を話し合いに費やしていたのだろうか。

「ああ、そうだな。ありや全焼だ」

まるで気にしていないかのような返事。

自分の家、それにあの大量の本でさえ全部燃えてしまったかもしれないのに。

「じゃあ、どうするんですか……？ その……寝る場所とか」

「まあ、寝ようと思えば寝れるだろうな。あの場所でも」

確かに面倒を見てくれるだけでも、ありがたいことだ。

だけど、あそこは無理があるんじゃないだろうか。

「でも、村長さんも知ってたじゃないですか？ その、家が燃えちゃったこと」

それなのに、この人に俺の面倒を頼んだ。
やっぱり、それ程までの厄介者なのだろうか。
俺もこの人も。

「……まあ、そんなこと気にすることはないさ。まだ、そんなに眠くはないだろう?」

そう言つてコニーさんは前方に見える元我が家を指差した。

「もうちょつと頑張つてくれ。手伝つて欲しい事があるんだ」

焼け跡に到着した俺達、だけどコニーさんはまるでそんなものなど無いかのように、脇を通り過ぎて林へと入っていく。

「離れんなよ? 今離れんのは危険だからな」

俺とこの人を襲つた犯人はまだこの村の中、何食わぬ顔で歓迎を受けている。

十分に念を押され、まだ危険が去っていない事を実感した。

林は大体が伐採された後なのか、遠くから見ていたほどに木々が密集してはいない。

時折何かの鳴き声が聞こえる気もするけれど、それは気のせいだといふことにしておこう。

「……よし、着いたぞ」

どんどん前に進んでいたコニーさんはそう言って足を止めた。その場にあつたのは杭に繋がれた一頭の馬、そして幌が張られた四輪の馬車であつた。

馬はコニーさんが近づくと、鳴き声を上げ、駆け寄ろうとする。しかし、足に繋がれた縄がそれを許さなかつた。

「よしよし、悪かつたな。今はずしてやる」

たてがみを撫でると、更に嬉しそうな鳴き声を上げる。先ほど聞こえたのも、この声だったのかもしれない。

「あの……これは？」

縄を丁寧にはずしながら、コニーさんは俺の質問に答える。

「こいつか？ こいつはな、村長ん家からかつぱらったんだ。ちょっと前にな」

かつぱらった、つまり盗難、泥棒だ。

今までに見ていたこの人から遠いイメージに、少し驚く。だけど直ぐに、その理由を聞いて見ることにした。

「その……何で盗んだんですか？」

はずし終わった縄を纏めながら、こちらへと振り返る。
その顔は何やら得意気であった。

「盗むつていうと人聞きが悪いんだがな。何て言うか……ほら、助けてやったんだよ」

「助けた……？」

盗んだのでは無く助けたということはこの馬、ただ単に村長に飼われていた訳ではないのだろうか。

「そう、助けた。まあ、いろいろあつてな……。それより、急ごうぜ？　日が沈んだばかりだから、夜が明けんのはまだまだ先だが、急ぐに越したことは無い」

答えは明かさずに、言葉を濁す。

言いたく無い事なのかもしれないし、そこについては追求はしないことにしておく。

そんな権限もないことだし。

だけど他にも、コニーさんは夜が明けのを気にしている。

そちらの理由は何なのだろう。

「あの……夜が明けたら何かまずいんですか？」

夜が明けて困ること……突拍子のない事ならばいくらでも思いつくけれど、現実的な事で言えば、あまり思いつくものではない。

単刀直入な質問に、コニーさんの表情は更に嬉しそうなものへと変

わった。

「まあ別にな、夜が明けたって構わないっちゃあ構わないんだよ。ただど夜逃げっていうくらいだから、そりゃあ夜にやらないといけないだろう?」

「あの、えっと……夜逃げですか?」

この人は何を言ってるんだ?

話が大幅にというか、全く予想外の方向に大きくズレている。

元はと言えば俺の怪我が治るまでの間、ありがたいことにこの人が面倒を見てくれるという話じゃなかったのか?

「そう、夜逃げ」

まるで当然、元から決められていた予定を報告する様な台詞。

「あー、その、いつから夜逃げ……をする事になったんでしょうか?」

「考えてもみる? あのピエロは村長の公認で、しばらくはこの村に滞在する。つーことはまた、俺たちの命を狙いにくるかもしれない。そしたら、安心して眠れないだろう? そこに寝る場所も燃やされたときたら、もうどっか他に行くしかないさ」

馬車の両側から伸びた木の棒を馬へと取り付け、家の方へと誘導していく。

それと共に説明する夜逃げの理由、必要性はとても理にかなっていないし、命が一番惜しいという意見にも俺は賛成だけれど……

「……いいんですか？」

「ん？」

コニーさんは足を止め、振り返る。

「この村を出ていいんですか？ その……故郷、とかだったりするんじゃないか……？」

自分の生まれ育った村なのであれば、そんなに簡単に離れてしまっていていいのだろうか。

命が大事なものはもつともな話で、死んでしまったら故郷も何もないけれど、他にも方法だってあるはず。

例えば魔法で……

「……なんだ？ そんなことか」

俺を見るコニーさんの顔は驚きなどでは無く、まるで呆れたようなそんな表情だった。

「いいんだいいんだ、気にすんな」

茶化す様に手を振るうと、その手で手綱を掴み、馬を家の方へ誘導していく。

そんな背中を追いかけてながら、俺は再び口を開いた。

「いいって……」

「だから気にすんなって。俺は元からこの村を出て行くつもりだったんだ。あんまり村人からの評判も良くないしな」

するとコニーさんは辿り着いた焼け跡を指差し、傍らの馬をそっと撫でた。

丁寧に、優しく。

「それに思い入れがあったのだって、村っつーよりこの家だしなあ。燃えちまったものは魔法でも戻せない。……俺の魔法じゃな」

足でふやけた燃えかすを蹴り上げ、ため息をつく。

苛立ちからと思えたその行動は地面から現れた扉によって、目的のあるものへと変化した。

「というわけで……俺の事はいいとしても、問題はお前さんの方だと思っわけだよ。この村の人間じゃないって事は確かだよな？」

「え、ああ……はい」

錆び付いた取っ手に悪戦苦闘する姿を視界の端に捉え、その質問に答える。

ここで嘘をついたところで、この先ボロが出ないという事は万が一にもない。

素直に答えるのが正解だろう。

「おし、じゃあどこから何しにこの村に来たんだ？」

未だに扉は開かないのかコニーさんは何度も態勢を変え、扉に挑みかかっている。

少しばかり滑稽なその様子に、ひっそりと笑みがこぼれた。けれど、直ぐにその笑みは鳴りをひそめる事になる。

「ああ、えつと……その、どこから……ですか？」

この類の質問が飛んでくる事は村長の家の時点で警戒していた。だけど今、時間差でやってきた答えられない質問。

いや、答える事はできるけれど、答えてはいけない様なそんな質問に戸惑いを隠せなかった。

「そう、どこからここに来たのかだ。今度は俺が質問する番だからな、ちゃんと答えてくれよ？」

言葉だけを聞いてしまえば、軽い尋問をされているようなそんな印象をうけてしまう。

しかし、その声色は決して問いただすようなものでは無く、むしろ優しく答えを引き出すようなそんな問い掛けだった。

答えてしまいたい。

素直にそう思ってしまった。

俺は恐らく別の世界からやってきた高校一年生の男子で、その世界には魔法も無くて、命を狙うピエロもいなくて……

そんな風に洗いざらい話してしまっても、受け入れてくれる様な気がする。

だけど。

「すいません……。それはちょっと言えません」

やっぱり素直に言う事はできない。

ならばいつそ、怪しまれるのを覚悟で潔く言う。

それが、俺が考えた最良の選択だった。

この世界に来てから、命を落としかけたのは二回。

その内一回は目の前にいるこの人、コニーさんが俺を助けてくれた。だから、言うてはなんだけれど例えこの人に正体を明かしても流石に殺されることはないだろう。

だけど、右も左も分からない異世界である以上、下手に目立ったことはしない方がいい。

生命の価値観が、元の世界とは異なるのだ。

「その……すいません」

今ここで、質問に答えなかったとしても多少は疑われる。

だけど、それも承知の上。

せめてここだけ乗り越えて、後のことはまた後で……

「ふーん、ああそう。じゃあまあ今度でいつか」

しかし、返って来た答えは酷く淡白で、とてもあっけないものだった。

肩透かしというかなんと言うか……

その主である人物はやつとこさ扉を開けることができた様で、その行動で更に呆気に取りられてしまう。

そんなコニーさんは俺の方に振り返ることすらなく、扉の先の暗闇を見下ろしていた。

「おお、良かった！ 無事だ無事だ。ほら、こっち来てみる！」

途端に振り返り、新しいおもちゃを買ってもらった子供の様な顔で手招きをする。

一体何がそんなに嬉しいのか、近付いて覗き込むと、そこには家にあつたほどではないにしろ、沢山の本が山積みになされていた。

「……これは？」

「本だよ本！ 俺が研究に使ってた貴重な本だ。特に重要なものは前もってここに保管しといたんだよ」

嬉しそうな顔がもはや喜びの顔に変化したコニーさんはどうやらただの村人ではなく、研究者であつたようである。

自称だから職としては何とも怪しいけれど。

積み上げられた本の中から数冊を抱え上げると、コニーさんは後ろから馬車へと積み込んでいく。

穴の中には先程までその本があったスペースの他に、まだまだ沢山の本が埃をかぶっていた。

「おい、片手でいいからちよつと手伝ってくれないか？ 本を中に積んでくれ」

ぼーっと見物をしていた俺へと、力仕事が迷い込んでくる。

腕を怪我しているとは言え、治療魔法とやらをかけてもらったせいか、ちよつと動かすくらいなら健康な腕とあまり変わりはない。

これなら本を運ぶくらい朝飯前だ。

念のために片腕だけを使い、俺は馬車へと本を積み込んでいった。

俺とコニーさんによって運び込まれている本。

その大多数が地下から場所を移し、馬車の車輪を軋ませる。

最後の一冊であろう本を拾い上げた時、その本の表紙に何気なく目をやった。

もちろん何が書いてあるのかは解らない、だけど薄汚れた埃の向こうの何ものにも染まることのない白い装丁に、少しの間目を奪われた。

「ほら、それで最後だろ？ 貸してみろ」

名残惜しいと思いつつも、どうせ俺には読むことが出来ないということに気付き、素直にそれを手渡す。

受け取られたその本は他のものたちと同じく、馬車へと積み込まれていた。

「じゃあ本はこれで終わりだな。次は……お前だ」

その言葉を聞き終わるよりも前に、何者かによって脇腹から掬い上げられる。

軽々と持ち上がったその体はそのまま空中を進んでいく。

「あ、あの！ えっと、ちょっと！」

抵抗虚しくその体、いや俺の体は馬車の中へと降ろされた。

鏡で見た時にも思ってたけれど、こんな扱いを受けるほどに俺はやっぱり子供なようである。

コニーさんに対して見上げなくてはいけない時点で、そんなことは明解であつたけれど。

「大人しく座つてろよ？とりあえず街までは送つてやつからな。その後はそこで考えようぜ」

子供に言い聞かせるようにそう言つと、馬車の後ろの布を下げ、下へと結びつける。

光が遮られ、少し暗くなった馬車の中は酷く埃っぽかった。

「それじゃあ、出発だ」

声を追つて後ろを振り返ると、コニーさんが馬車の前方へと座り、手綱を握っていた。

それを振るうと同時に、馬が鳴き声を上げ、動き出す。

舗装などされていない道を馬車はゆっくりと進み出した。

どこに向かっているのか、とか、これからのこととか、不安は沢山あったけれど、それを問いただそうという気にもなれない。

馬車は揺れるし、周りには埃を被った本ばかり。

そんなものにやる気を奪われ、俺はケツは押さえながら咳き込むしかなかったのである。

10・悪魔の助太刀

馬車が走り出して、どれほど経ったのだろうか。

とは言って見たものの、多めに見積もっても十五分、いや恐らく十分も経っていないのだろう。

言ってしまったばまだ、出発して間も無いのである。

村が少し遠ざかったとはいえ、ケツの痛さとは対照的に目的の街へはまだまだかかりそうだ。

暇を持て余して手に取った本も、暗くてまともに読む事が出来ない。明かりがない、という事がここまで不便だとは思わなかった。

馬車の後方の布をめくり上げれば、月明かりで辛うじて文字を見る事ができるが、そこで気付く。

俺はこの世界の文字を読む事が出来ないのだった。

馬鹿だ、阿呆だ。

それとも疲れているのだろうか。

少し眠って、疲れを取ったほうがいいのかも知らない。

今日はいろいろありすぎて、もう脳がぐたくたに疲れ切っているのだ。

本と本の間を縫って、埃っぽい床に横たわる。

軋む板に耳をつけると、道の鼓動が直に鼓膜へと伝わってきた。

普段ならばとても眠れるような環境ではないけれど、ぐたくたのこの体には豪華なベッドと何ら変わりがない様に感じる事ができる。

徐々に瞼が重くなり、視界が更なる暗闇へと落ちていく。

「……あつぶねえっ？」

共に落ちていく意識は眠りへと染まることはなく、そんな声で現実

へと引き戻された。

辺りに響き渡ったのは馬車を操るコニーさんの声。

それはどう考えても穏やかなものではなく、不安に眠気を吹き飛ばされた俺は直ぐに起き上がった。

と、同時に急停止する馬車。

周りに積まれた無数の本は崩れ、無残にばら撒かれていく。

その本に紛れて、俺自身の体も前方へと大きく吹き飛ばされた。

馬がいなきを上げ、馬車は完全に停止する。

少しの痛みを取り戻した右腕を庇いながら体勢を立て直すと、前で御者席に

座るコニーさんの背中へと声をかけようとする。

が、それすらも俺は実行することが出来なかった。

頭へと加わる力が、俺を本の影へと押し込む。

その力を発揮した腕がコニーさんの方へと引っ込んでいったのを、辛うじて見ることができた。

「……静かにしてる」

囁く様に発せられた声が事の重大さをありりと物語っている。

一体何が起こっているのか、脳内で可能性を列挙している内に一つの大きな不安へと行き当たった。

「逃げようとしたってムダですよ？ 貴方達の行動は全て筒抜けですからね」

そう、この声だ。

今この現状、起こりうる可能性の中で最低最悪最狂の人物が俺たち

の前に再び立ち塞がった。

狂気じみた声は落ち着きかけていた心を、瞬く間に不安や恐怖で塗り替えていく。

カチコチに固まった勇気が動き出す事は無く、ただ本に埋まりながら震えている事しか出来なかった。

「また、お前か。いい加減にしつこいぞ？」

馬車の外で、コニーさんの相変わらずの声が聞こえる。

ただ一つ違うところがあるとすれば、語尾が微かに震えている様に感じた。

気のせいかもしれないけれど、彼だって完全無敵のスーパーマンではない。

怖がるようなことがあっても、何ら不思議ではないのだ。

自分は隅っこで縮こまっているだけのくせに、人の恐怖で更に不安が高まっていく。

酷く情けない話だ。

「しつこい、と言われましてもね、私だって好きでこんな辺鄙な所に来てきている訳では無いんですよ。本当はサンドイッチでも持って、ピクニックでもしたい気分なんですよ。あ、こんな夜にピクニックをする人なんかいませんかね？ 普通。ンハハハハ」

何がそこまで面白いのか、道化師は壊れたおもちゃの様に笑い続ける。

しばらく続いた笑い声が止んだかと思うと、代わりに鳴り響いたのは大きな爆発音であった。

それによって飛ばされたのであろう砂利や木の枝が、幌へとぶつか

り音を立てる。

俺は唇を噛み締めた。

そして、再びの爆発音は俺のすぐ後ろ、馬車の前方すぐ近くから鼓膜に伝わった。

耳をつんざく様な爆音に肩をびくりと震わせると、ゆっくりと、かつ慎重に後ろを振り返る。

音を立てないように本を掻き分けると、できた隙間から顔を覗かせた。

「う、うそ……だろ？」

思わず零れた驚愕の声。

そこに広がっていた景色は予想とは遥かに遠い、戦闘の跡。

大きな傷を負ったのか、馬車の少し前方、コニーさんの足元の地面には鮮血が滴り落ちている。

一方の道化師は傷一つ無く、素顔のままの薄ら笑いを浮かべていた。誰がどうみても、こちらの不利は明確だ。

もう無理だ、そう肩を落とし膝をつく、コニーさんの叫び声が聞こえた。

「おいっ？ 走れっ？ もう静かにしてなくていいから、村の方へ走れっ？」

必死の叫びで俺を逃がそうとしてくれている。

だけれど、膝の震えも胸の座喚きも頭の混乱も、何一つ収まる事はない。

頭では解っている、ここで無抵抗でやられるより、例え結果が同じでも抵抗した方が希望がある事だってわかっている。

けど、だけど、足が震えて動かない。

いくらコニーさんを嫌っているとはいえ、命の危機とあらば村の人達も助けてくれるだろう。

この現場を見せれば、コニーさんを見直してもくれるだろう。

だから、早くあの村に。

あの村に行かなくちゃいけない！

「……くそっ！」

苛立ちをぶつける様に、馬車の床を叩く。

相変わらず足は震えている。

だけど、何故か馬車の床板にヒビが入った。

そんなに強く叩いた訳でも、板を壊せる程の力がある訳でもないのだから、実際問題板にヒビが入るなど、あり得ない話だ。

何が起こっているのかわからないまま、顔を上げ辺りを見回す。

すると何ということか、ヒビが入っているのは馬車の床板だけでは無かった。

本は裁断されたように、幌は誰かのイタズラでぼろぼろに破かれたように、そんな風な亀裂が入っている。

混乱が加速する頭を落ち付けるように深呼吸をするが、状況が好転する事はない。

すると、三たび外からの爆発音が鳴り響く。

「コニーさん！」

あの傷ではもう一回攻撃をくらってしまえば、命が危なくなってくるはずだ。

そう思い音の発生源へと反射的に振り返る。

するとまた、現実を大きく超越した様で、予想の斜め上さえも遥かに通り過ぎてしまう様な現象が、俺の目へと飛び込んできた。

「な、何だよ……これ？」

空間が無くなっていたのである。

先程まで本が山積みになっていた景色が、ヒビを境にこぼれ落ちていく。

ヒビの入った板も、幌も、真っ白な空間へとこぼれ落ち、吸い込まれていった。

そんな今までで一番、非現実的な光景を啞然と呆然と眺めていると、俺の周りは既に、何もかもが無くなった真っ白の空間に支配されていた。

背中を伝う嫌な汗。

もしや、この現象はあの道化師の魔術で、不幸な事に先手を打たれてしまったのだろうか。

だとしたらこの魔術、もしかして永遠にこの空間に閉じこめてしまふとかそういう恐ろしいものなんじゃ……。

溢れ出そうになる涙を男の根性で何とか堪えていると、背後から前に聞いた事のあるような声が聞こえてきた。

「やあやあ、久し振りだね。柏木正一くん、だったかな？」

久しく呼ばれることの無かった名前。

時間、そして期間で言えばそんなに間が空いた訳ではないけれど、その言葉はすごく懐かしい響きを持って、俺の耳へと届いた。

「いやいや、良くやってくれたよ。会いたかったぜ」

漆黒の羽をはためかせながら、俺をこの世界へと導いた張本人、あの牛とも鳥とも形容出来ない悪魔が覚えのない労いの言葉をかける。そんな奴を前にして、足がすくんで動けないのは前に会った時と同じであつた。

完璧にショートしてしまった脳内回路を元通りにすべく、あれこれ考えを巡らせるが、そのどれもが役に立たないものだ。

固まってしまった俺を見兼ねたのか、悪魔は再び、その口を開いた。

「まあ、そんな緊張するこたねえぜ？ そんなんじゃあ、ろくなことにならねえぞ？ それに、ぼーっとしてりゃああの男もそろそろ死んじまう」

悪魔が言うのは恐らくコニーさんの事。

一瞬にして頭の中から飛んでしまっていたそのことを、こんな奴の言葉で思い出してしまった。

「お、おい……お前」

「ん？ 何だ？」

恐れながらに恐る恐ると声を掛けると、悪魔は何とも普通に返事を返してきた。

前に会った時のような気迫というのか、そういったものを感じることは出来ず、悪魔に対していうのもおかしいけれど落ち着いている、そんな印象を受けた。

「……ここはどこなんだ？」

この真つ白な空間、この非現実的な状況に納得のいく説明を求めて、悪魔へと問い掛ける。

素直に教えてくれはしないのかと思えたが、奴は右手であごの辺りを弄ると、案外素直にその答えを教えてくれた。

「ここは俺様が作ったと言っかなんと言っか……。まあ、今は所有している、とでも言っておこうか。とりあえずそういう空間な訳だよ」

悪魔の所有空間。

その答えに道化師の魔術、という説は幸いにも砕け散った。

納得のいく説明では無かったけれど、そんな俺を知ってか知らずか、悪魔は更に説明を続ける。

「時間がないからどんどん言っちゃうけどね、何故君がこの空間に入れたのかという、それは君がどこかに行きたい！ と強く願ったからなんだよね。だから、ほら試しにもう一回頭の中で考えてみてよ。君がどこに行きたかったのか、今どこに行くべきなのか」

ペラペラと俺の理解が追いつかない内に、悪魔はよく分からない理論を並びたてる。

俺が村に戻って助けを呼びたい、そう強く思ったからこの空間に入ってしまったということなのだろうか。

「あ、でも君が元いた世界に戻りたいってのは駄目だからね。それはズルだし反則だし、基本的に無理だから」

少しばかりの希望まで砕くようにそう言うと、悪魔はにたと気味の悪い笑顔を浮かべる。

「さ、だから行ってみよう。君が今行くべき場所、その景色を頭の中にできるだけ正確にイメージするんだ。まるで自分がその場所にいたい」

悪魔は俺に何をさせたいのか。

何やらそれが正しいことであるかのように喋り立てているけれど、冷静に考えてみれば、またどこかへんてこりんな世界に飛ばされてもするんじゃないだろうか。

それならば従う訳にはいかない。

俺は無言で悪魔を見つめる。

その意図を察したのか、奴はまた気味の悪い笑みを浮かべた。

「そうかそうか、従わないっていうのか。ならまあ、ここで殺してしまっけれどいいのかなあ？ 君はあの男を助けられずに、ここで人知れず死ぬことになる。それでいいのかな」

「なっ？」

まるで中にも浮いているかのようなスピードで俺に接近すると、悪魔は俺の首を軽く握った。
殺される。

こんがらがった頭の中から生存本能が動き出し、先ほどの悪魔の言

葉が響いた。

俺が今行くべき場所のイメージを頭の中に正確に構築する。
自分がまるで、今もそこにいるかの様に。

俺が今いるのは真っ白な空間ではなく、あの村。

あの村にいるんだ！

生き残るためそう強く念じると、散らばった空間の破片がまるでパズルの様にはめ込まれて行く。

それに伴って悪魔の姿は薄れていき、最後に奴は一言を残して消えていった。

「そうだそれでいい」

感覚の無い地面がしつかりと土の感触を取り戻し、目の前にはあの村が広がっている。

コニーさんと道化師が戦っているあの道でもなければ悪魔の空間でもない。

寝静まったあの村に、俺はしつかりと佇んでいた。

11・協力の失敗

何が起こってこうなってしまったのか、最初は全くわからなかった。いや、情報を整理したところで、最初から最後までわからないところの方が多い、というかわからないところしかない、そんな状況だった。

今現在、目の前に広がる景色は先程までいた真っ白な空間ではなく、かといってその前にいた馬車の中でもなければあの悪魔の姿も無い。既に旅立ったはずのあの村に、俺は今立っているのだった。

もう少し現状を認識するための時間が欲しい、それが本音であったけれど、よくよく思い出してみれば、俺にはこの場所に来た理由があったのだ。

拳を強く握り締め、あの惨状を思い出す。

コニーさんを助けなくてはならない。

そして、その願いは悔しいかな悲しいかな、俺の力では到底叶えることは出来ないのだ。

人に助けを求めるということはその人を危険に晒してしまうということだけれど、それを承知の上で、俺はあの人を助けたい。

わがままを承知の上で、だ。

「すいませーん！」

この世界に来てから出したことの無いような大声で呼びかけながら、木製の家を順番に周って行く。

小さな村とはいえ、やはり夜は戸締まりをちゃんとしているようで、乱暴にドアノブを回しても、その扉が開くことはない。

しかたがないので裏手に周り、窓ガラスをドンドンと叩く。

窓の内側にあるカーテンのせいで中の様子を見る事はできないが、時間も時間だしほとんどの人が家で寝ているだろう。

しかし、叩けど叩けど一向に反応はなく、静かな村に喧しい騒音が鳴り響くだけであった。

誰もいないのか？

そう思い他の家に向かおうとした時、反応は予想外の方向から返ってきた。

「何だあ？ 俺ん家に何か用か？」

背後から聞こえた声に振り向き、その主を見ると、昼間に何度か会ったあの屈強な男性であった。

そしてその横には見覚えのある女性がランタンを持って佇んでいる。返事をするのも忘れ、この女性とどこで会った事があるのか、これまでの出来事を思い出すと、程なくして一つの結論へと至った。

「あ、昨日の女の子！ もう怪我は大丈夫？」

そう、この女性は俺が異世界に来て早々、狼に襲われていたところを見事な投球技術で助けようとしてくれた、あの女性であった。

夜風にたなびく綺麗な金色の髪を押さえながら、女性は優しい視線を向ける。

だが、隣にいる男性は俺に好意的ではないようだった。

「おいおいアイナ。こいつは魔法使いだ。面倒はごめんだからな、さっさと行こう」

男性は横目で俺を見ながら、隣のアイナさんへと話し掛ける。

こそこそと内緒話をしているつもりなのだろうが、物音一つないこんな夜中ではその声は丸聞こえであった。

そんな話を終えると男性は目線を俺と同じくらいに落とし、取り繕った優しい声で語りかける。

「嬢ちゃん、子供はもう寝る時間だ。それに俺達は用があるからな。早くコニーのじじいのところに戻った方がいい」

表面上だけの笑顔を浮かべ、似合わない声色でそう言う。

俺が現在の肉体と同等の精神年齢であったのなら、コロっと騙されてしまいそうだが、一応高校生である俺にそんなものは通用しなかった。

何故、魔法使いがここまで邪険にされるのかはわからないけれど、それはただ単にこの人個人の考えなのだろうか。

「ちょっと、人の師匠をじじいって言うのは無いんじゃないの？

第一、今ベントと一緒にいる私だって立派な魔法使いなんですけど」

ベントと呼ばれた男性とは違い、アイナさんは先程の言葉への返答を、しっかりと聞き取れるような声量で返した。

しかしアイナさんが魔法使いで、しかもコニーさんの弟子だったとは何とも予想外の話である。

「……おいおい、アイナは魔法使いじゃなくて治術師だろう？」

内緒話の一部を匂わせる様な発言をされてしまい、少し動揺しながらベントさんはアイナさんの間違いを正す。
しかしそれは間違った訂正であつたようだ。

「そんな職業はこの世にありません。それよりこの子の話を聞いてあげましょう？　こんな夜中に只事じゃないわ。何があつたの？」

この発言にベントさんも渋々話を聞くことにしてくれたようで、俺の言葉を待つ様に押し黙る。

やっとこさ発言のチャンスを手に入れた俺は二人にコニーさんの緊急事態を告げた。

確実に助けに協力してもらう為、あの道化師のことは隠して。

「……………それ、本当？」

事の顛末を聞いたアイナさんは俺に確認を取る。

ゆっくりと頷いた俺を見て、アイナさんの顔が見るからに青ざめていった。

「ベント！　貴方も来て！　助けに行きましょう」

師匠のピンチを聞き、アイナさんは隣のベントさんに協力を仰ぐ。
しかし、ベントさんは面倒臭そうに頭を掻くと、否定的な意見を口にした。

「まったく……………何で俺が魔法使いのじじいを助けなきゃいけないんだ

よ」

「魔法使いでも人は人でしょ！ ほら、早く武器持って来て！ そ
こら辺の盗賊くらいわけないじゃない！」

道化師の代わりにコニーさんは盗賊に襲われている、ということに
なっている。

「しょうがないな。今回だけだぞ」

ベントさんは間接的に自分の腕を褒められた事が嬉しかったのか、
照れた様な表情で武器を取りに行った。

「大丈夫。ああ見えてもベントは剣の腕だけは凄いのよ？ だから
安心して。それにコニーさんだって凄い魔法使い何だから大丈夫よ」

アイナさんは俺を安心させるように頭を撫でる。

少し混乱し、動揺していた俺の心も少し落ち着きを取り戻した。

やがて一本の剣を腰に差したベントさんが戻ってくると、早く現場
に向かおうと言うアイナさんに少し待ってもらい、俺はある一つの
可能性を試して見る事にした。

俺がこの場所までやって来た、あの超常現象だ。

「あの俺と手を繋いで、輪っかっていうか……円になってもらって
もいいですか？」

アイナさんは俺の提案、そしてすっかりミスの一人称に怪訝な顔を浮かべながらも、従ってくれた。
しかし、俺の負傷した手を気遣う様に手を繋いでくれたアイナさんとは違い、ベントさんが差し出したのは自らの腕ではなく腰に差したもののよりも短い一本の短剣であった。

「ちょっとベント！」

その行動にアイナさんが咎める様な声を出す。

「悪いが、こればかりはしょうがない」

ベントさんはアイナさんの声に従う事はない。

アイナさんの謝罪の視線を受けながら、俺はその短剣の鞘を掴んだ。
やっぱり、ベントさんは魔法使いが嫌いなのだろう。

「それじゃあいきますね……」

ベントさんとアイナさんが生身の手を繋いだのを見て、俺は言う。

瞳を閉じて、あの場所をイメージする。

怪我を負ったコニーさん、そしてあの道化師、馬車。

俺にアイナさん、ベントさんはあの場所にいるのだ、そう思い込み、ワープを試みる。

果てしなく続く様な静寂が終わり、俺はゆっくりと瞼を持ち上げた。

「おやおや、これは驚いた……！」

視覚と聴覚、その両方に飛び込んで来たのはアイナさんでもベントさんでもなく、そしてコニーさんでもない、あの道化師だった。ワープ、瞬間移動は成功したのだ。

しかし、よりによってこいつの目の前に飛ぶとは本当に運が無い。だけど、今回は味方がいる。

硬直した体に鞭をうち、辺りを見回した。

「うそ……まじかよ」

そこにあの二人の姿は無かった。

背筋が凍り、冷や汗が伝う。

やばいやばい、これは最悪の事態だ。

そして、不意に気付く左手の感触に目を向けると、まるで俺を馬鹿にしたかのようにあの短剣だけがずしりと存在感を放っていた。

こんなもの……、こんなものだけあってもどうしようもないじゃないか。

「これは一体どうした事でしょいかねえ？ 貴方、それはあの魔法なんですか？ だとしたら、私も流石に驚きましたよ」

仮面に阻まれる事のない道化師の顔は彼の発言通り、純粋な驚きにそまっております、こちらへと近づくその足取りもふらふらと落ち着かないものだった。

俺がじりじりと後ずさると、付かず離れずで道化師もこちらへとやってくる。

しかし、先に足が止まったのは不幸にも俺の方であった。

恐怖で足がもつれた訳ではなく、地面に落ちている何かにつまずき、勢い良く尻餅を付く。

驚きながら衝撃を覚悟するが、そのつまずいた何かが柔らかいクツシヨンとなり、衝撃はほとんどなかった。

後ろ手に付いた掌に、べちゃっとした感覚が纏わり付く。

ゆっくりと掌を見ると、その真つ赤な光景に意識が遠のきそうになった。

貧血のような状態に陥り、多量の血に染まった掌を視界の外へと無理矢理に追い払う。

「おやおや、死人をソファーにするなど随分と肝が座っていますなあー。ンハハハハハ」

俺の突然の出現に関しての驚きから解放されたのか、道化師はしっかりとした足取りで、奇妙で不気味な狂った笑い声を上げる。

そして、共に発せられた言葉の内容に、嫌な予感が脳内を駆け巡った。

「う……うああ……」

その予感は少しもぶれる事なく的中し、俺の心を負の意味で激しく揺さぶる。

俺の下に倒れていたのは紛れもない、あのコニーさんであった。

情けない声を上げながら跳び退き、視線を再び道化師の方へ移すと、奴は更なる笑みを浮かべ、目前へと迫っていた。

逃げなくちゃ。

その言葉だけが脳内にいくつも並び立てられ、消えていく。

あの瞬間移動で村に戻れば、俺は助かる。

しかしそれから助けを呼んだところで、村からここまで最低でも十分くらいはかかってしまう。

それじゃあ間に合わない、コニーさんは早く治療すれば助かるかもしれないのに。

なんで……

「何で人は連れてこれないんだよ！」

左手の短剣を勢い良く地面に叩きつけると、反動で鞘が抜け、それは道化師の足元へと転がって行った。

あの瞬間移動で連れてこれたのは意志も持たぬこの短剣だけ。

使う人が使えば救いとなるその武器も、何の心得もないものが持ったところで絶望しか生まなかった。

「……人を連れてこれなかった？」

道化師はそう呟くと、思案するように足を止める。

そして次の瞬間、狂ったような高笑いを始めた。

「ンハハハハハ！ そりゃあそうですよ！ 貴方の魔法は恐らく142ページの次元的空間転移魔法。大元のそれなら他人を巻き込む事もできたでしょうが、貴方のは縮小版。所謂偽物なのですから、そこまで期待するのは馬鹿というものですよ！」

その言葉は理解に苦しむ単語のオンパレードで、一体何が言いたいのか全くもってわからない。

そしてそんな俺の表情を読み取ったのか、道化師は微笑と共に言葉を続けた。

「ほう、何も知らない、何もわからないといった顔ですねえ、それは。やっぱり貴方も馬鹿ですよ。そして……」

振り上げた道化師の右手が、強烈な光を発する。

眼がくらみ、反射的に眼を閉じてしまう。

まずい、このままじゃ……

「馬鹿は早く死ぬべきです！」

死ぬ。

殺気を纏った道化師の声に、俺は急いで脳内にイメージを組み立てていった。

12・忠誠の黒馬

瞼越しから伝わる光の強さが増し、体を強張らせるが、爆発音は全く見当違いの方向から聞こえてきた。

飛んでくる小石や砂を腕で防ぎながらゆっくりと目を開けると、遠くにあの道化師の背中が見える。

想像した場所とは少しずれていたけれど、瞬間移動の成功だ。

道化師の放った光弾が着弾した場所を見ると、激しく舞い上がる砂埃に阻まれて、地面すら視認できない。

そしてそのおかげか、道化師は俺が移動したことにまだ気付いていないようだった。

よし、今の内に……。

足音を立てないように慎重に立ち上がり、道を逸れた脇にある樹の影へと身を潜める。

まだ絶対的な安心を得た訳ではないが、一時的な安堵に背中を預け座り込むと、左手に握られたままの短剣へと視線を向けた。

刃渡り15センチはあろうかというその刀身には溝が穿たれている。そして、怪しく光る両刃は平和ボケした世界の人間から見ると、とても危なく物騒なものだった。

これでありつに反抗してやろうか、そんな一時の気の迷いとも取れる考えが浮かぶが、柄を握る弱々しく真っ白な手を見ると、そんな思考は一瞬にして吹き飛んでしまった。

「どうするどうするどうする……」

頭を掻きながら、壊れたおもちゃのように呟く。

幸いにも生き残ることに關してはあの魔法のおかげで、そう難しい

ことではない。

だけど、あれで何処かに逃げ延びたところで、助けを呼んでもコニ
ーさんの命を救うことは出来ないのだ。

正直な話、あの出血の量ではもう助かる見込みはないのかもしれない
いけれど、そこは異世界人の生命力、そして魔法の力を信じることに
しよう。

命の恩人というか、異世界で良くしてくれた人が死んでしまうのは
やっぱり嫌なのだ。

「……よし」

決心したように呟きながら、重い腰を上げる。

やっぱり俺が小さな抵抗を続けたところで、奴を倒すことは出来ない
いし、万が一倒したところでコニーさんの治療が行える訳でもない。
村に戻れば、俺の怪我を治してくれた魔法使いがいるはずだ。

とりあえずはその人とさっきの二人にこの場所を教えておくのが、
先決なんじゃないだろうか。

そう思いあの村を脳内で思い浮かべるが、頭に一つの不安がよぎっ
た。

さっきの爆発。

俺はあれをよける事ができたけれど、その近くには血だらけのコニ
ーさんが横たわっていた。

ただでさえ危険な状況、あんな攻撃を食らっていたら、もうひとた
まりも無い。

はっと思い立ち、樹の影から慎重に顔を覗かせ様子を伺うと、舞い
上がっていた砂埃は晴れ、夜の闇を取り戻していた。

そして、地面には先ほど一つも変わる事の無い、コニーさんが

倒れている。

あんなに大きな爆発で小石や砂も吹き飛ばされていたというのに、微動だにしていないコニーさんに俺は少しの違和感を抱いた。

そして、突如聞こえる風切り音。

何か来る！

咄嗟の判断で樹の影にしゃがみ込むと、大きな振動と共に美しい月の光が差し込んだ。

何が起きたのか、そう思い顔を上げると今まで隠れていた、過去の俺が両手を回したところで到底届かないような大樹が切り取られ、倒壊していた。

「そこにいたんですか」。流石に便利ですねえ、その魔法」

いつの間に移動したのか、道化師は既に切り株と化した樹の向こうから、こちらを覗き込んでいる。

背後の月明かりにライトアップされ、こちらからは逆光となるその姿はまるでゲームに登場する大魔王のような、そんな圧倒的絶望感を与えた。

「ちょ、ちよつとま、待った！」

震える身体と震える声で、脳内にあの村をイメージするまでの時間稼ぎを試みる。

「……………何を待つのでしょうか？」

道化師はおどけた様に首を傾げるが、そんな仕草をしたところで、彼に可愛らしさが付与されることはない。むしろ狂気染みたその容姿に、更なる拍車を掛けているだけであつた。

「そ、その少し話をしようじゃあ……ないですか」

「ふん。随分と偉そうな物言いですな」

道化師はあからさまな不機嫌さを、顔に浮かべた。くそ、なんで俺がこんな奴に下手に出なくちゃならないんだ。そんな屈辱感を感じながらも、それを顔に出さないよう怯えた愛想笑いを貼り付けた。

「じゃ、じゃあその……教えてくれませんかね。貴方の、その、狙いは何なんでしょうか……？」

目の前の切り株の汚れを払うと、道化師はため息をつき、そこに腰をかける。

「……いくら貴方のような子供といえど、私がそんなことを簡単に教えると思いますか？ それに今のこの状況、どう考えても私の優勢でしょう？ 貴方は逃げることは出来ても、私を殺すことは出来ない」

こちらへと顔を近づけながら、そんな俺が今一番痛感していることを言つてのけると、奴は俺の首を掴み押し倒した。

落ち着き払った道化師の声にすっかり油断していた俺はなす術無く、土の地面へと背中を打ち付ける。
苦しい。

奴の右腕が容赦無く俺の首を締め付けていく。

「ぐあ……う……？」

窮屈になった喉から絞り出される呻き声が、まるで警告音のように死の近付きを知らせていた。

本当に死ぬ。

焦りながら急いであの村をイメージするが、遠のく意識の中で白く霞んでいくそれはとても明確なイメージと呼べるものではなかった。

「ああ、そうだ……」

道化師の声が聞こえ、不意に緩む首への圧迫感に肺へと急速に空気が流れ込む。

その勢いに咳き込むと、飛散した唾液を拭う様にしながら道化師は更なる不快感を示した。

そして俺の頬を軽く叩くと、髪の毛を掴んで強引に前を向かせる。

「貴方が助けを呼びに行った、という可能性を見逃してましたねえ。たと呼んでなくとも、時間の問題か……」

思案するように顎に手を当てると、道化師は未だ髪を掴んでいる方とは別の手で、少し離れた場所にある馬車を指差した。
そうだ、今は誰もが寝静まっている様な真夜中。

あの爆発音を聞けば、せめてあの二人はここにやって来てくれるだろう。

こいつは少し、派手にやり過ぎたのだ。

「本はあの中にあるのですか？」

道化師もその結論に至ったらしく、少し焦りの表情を浮かべている。そのせいか発言はとても迂闊で、自ら目的を明かしている様なものだった。

今、俺を殺しておけば良かったのに。

少しだけ、ほんの少しだけこいつに抗うと言うか、一矢報いることができる案が脳内に浮かび、心に希望が芽生えた。

「……何を笑っているのですか」

自然と零れてしまった笑みに反応し、道化師はもう一度首を締める手に力を込める。
だけでもう遅い。

希望が見えて落ち着いた頭で、先ほど見たばかりの光景をイメージする。

目の前の道化師の顔が次第に薄らいでいき、空間と共にぼろぼろと零れ落ちると、その欠片は新たな景色を持って俺の周りにはめ込まれていった。

すこし離れたあの村をイメージするのには多少の時間が掛かるが、今いる場所のすぐ近く、あの馬車の所ならばすぐ様にイメージを構築することができる。

反抗精神の立ち上がった頭は恐怖で埋め付くされていた時と比べて、まるで油でも差されたかのようにスムーズな回転を見せたのだった。

「……よし」

目前の馬車を見上げて移動の成功を確認すると直ぐに立ちあがり、その車輪を掴む。

道化師は多分、まだ俺の居場所を突き止めていないだろう。

それならば、今の内に奴の目的のものが納められたこの馬車を村へと瞬間移動させれば、奴の目的が達成されることはないのだ。

奴が居る方をちらちらと伺いながら、馬車と俺があのか村に居る様を思い浮かべる。

だがしかし、一向に移動の兆候は見られなかった。

「何でだよ……」

焦燥感に駆られ、疑問の言葉を吐き捨てる。

一体何故移動することが出来ないのか。

再び軋み出した頭で必死に原因を考えると、ある一つの要因が浮かんだ。

「……こいつか？」

原因と思しき生物に視線を向けると、そいつはこの惨状に怯えることとはあっても、決して逃げることなどはしていない。

まるでご主人を心配しているかの様に小さな鳴き声を上げ、震えていた。

この馬、この馬が馬車に繋がれて居るから、移動をすることが出来ないのか？

そんな、一応納得のできる解答へとたどり着くが、すぐに新たな疑問点が湧き上がって来た。

未だ俺の手の内にある短剣。

この短剣はあのベントさんの手をすり抜けて、俺と一緒に移動をすることができた。

それならばこの馬車だって、馬を残してあの村へ移動することができるはずだ。

急がなくなちゃいけないのに……。

やっぱり悪魔のよく分からない力に頼った俺がいけなかったのか？ そんな後悔とも取れる感情に苛まれていると、まるで蛇に睨まれた蛙の如く

、急な殺気にあてられ身体がぶるりと震えた。

消去法、いや必然的にその視線の正体はあの道化師だ。

「はやっ……」

俺があいつの手を抜け出して、まだそんなに時間は経っていないと思ったのに。

恐る恐る道化師の方に視線を向けると、奴の鋭い眼光にしっかりと焦点があつた。

遠巻きに佇む道化師は俺の姿を発見すると体ごと振り返り、右腕を天へとかざす。

その行動に俺の焦りはより色濃くなった。

撃ってくる。

何度目か分からないあの爆発する光弾を、奴はまた撃ってくるつもりだ。

すぐさまどこかの近場に瞬間移動を試みようとするが、ふとある考えが浮かび、俺はその行動を中止した。

この馬車を盾にすれば、奴は攻撃を仕掛けることが出来ないのではないか。

そんな考えで、俺は道化師へと声を張り上げた。

「ちょっと待ったー！　そ、そんな攻撃したら、この中の本も全部燃えちゃいますよー！」

馬車の車輪をぽんぽんと叩きながらそんな風な忠告をすると、道化師は呆気なく、その右腕を地面へと垂らした。

案外これは話し合いで解決できるかも。

今までの事を考えれば酷く甘い、そんな考えを抱き始めたその瞬間、地を蹴る激しい音が辺りへと響き、厳しい現実を思い出させた。

「ふざけるなふざけるなふざけるな？」

ぞくりと背筋に伝わる汗。

狂った様に叫びながら、狂った様な表情で、狂った様に走り来る道化師の恐怖を駆り立てるその姿に、足がすくんだ。

まずい、何がそこまであいつの怒りに触れてしまったのか。

急激な感情の変化に着いていけず、ただ立ち尽くすしかない。

そんな中、少し遠くから声が聞こえて来た。

「おい……そのダガー貸せ……」

弱々しいながらも、はつきりとした意思を持ったその声は紛れもなく、昏間に聞いたあのコニーさんの声であった。

嬉しさと安心感が込み上げ、そちらへと視線を向ける。

小さな声ではお互いの耳に音が届きそうにないような、数メートル先に倒れるコニーさん。

その姿に少し疑問を抱くが、横たわる周りの地面に、塗りたくられた様に広がる漆黒の闇に気付き、顔を強張らせた。

そうだ。

例え今、コニーさんが生きているとしてもこの重傷では……。

横から迫る鋭い疾走音に怯え、意識を向けながら共に焦りが高まっていく。

「いいから早くしろっ？」

間にある距離など関係ないかの如く、はっきりと鮮明に聞こえるコニーさんの声。

そして着実に距離を狭め、近づく道化師。

どっち付かずな視線を宙に這わせ、今現在するべき行動、そしてその矛先を全く定められない。

どうすればいい？

そんな何とも情けない感情に頭を締め付けられ、俺は焦りに負け、やけくそな選択を下した。

解決の糸口を生み出すのを諦め、その役目を他人に委ねたのだ。

少し離れた場所に倒れている、血だらけの恩人に。

コニーさんが求めたのは俺の左手に握られたこの短剣。

それを右手へと握り直し、大きく振りかぶる。

回転しながら空中へと飛び出したその凶器は真っ直ぐにコニーさんの元へと進んでいく。

しかし、無我夢中で放り投げたその瞬間に俺はある重大な事に気付いた。

鞘の抜けた刀身は綺麗な月の光を放っている。

これ、刺さったりしないよな？

自らの手で命の恩人に止めを刺してしまうなんて、笑い話にもならない。

宙に舞う刃をそんな落ち着かない気持ちで見つめていると、もう直ぐ近くまで近づいていた音を思い出した。

そんなところまで来てるのか……！

振り向いたその方向には道化師が、

もう十メートル圏内程まで迫っていた。

どうにでもなってしまうえ。

ここまで命の危機が間近に迫ると、思い浮かぶ言葉はそんな投げやりなものだけであつた。

恐怖に腰が抜け、地面に尻餅をつく。

そのどすんとした音と同時に、まるで砂場の山にシャベルを勢いよく刺したような、そんな音が聞こえて来た。

震える唇を噛み締めながらその音がした方向を見ると、今さっき投げたあの短剣がコニーさんの前方、こちら側の地面に突き刺さっていた。

届かなかった……？

そうだ、今の俺は男子高校生ではなくて幼い少女だ。

例え小さな剣だとしても、この身体には重すぎる。

くそっ！ とんだ大失敗だ。

どうすればいい？

そう問う様にコニーさんを見つめると、彼はその血が伝う顔でにと笑って見せた。

何でこんな時にそんな風に笑っているのか？

今、これからこの道化師に俺たち二人とも殺されてしまふに違いな

いのに。

何で……。

俺を安心させる為か。

精神的には高校生男子のこの俺も、外から見れば幼い少女。

まるで子供をあやすかの様な、策などないそんな笑顔なんだろう。

死の淵に立たされてまでのコニーさんの優しさに、柄にも性別にもなく、不意に涙が零れた。

その現象に、恐怖のせいだと言いつつしながら、まぶたの裏の暗闇に視線を這わせる。

ああ、家に帰れたかった。

母さん、父さんごめんなさい……。

心の中に遺書を書き、やがて来る苦痛に身体を硬めるが、その行動は両者ともに全くの無意味に終わったのだった。

瞬間的に差し込んだ淡く翠色の光。

その美しく優しい光に目を開くと、道化師が体勢を崩したのか、あの走り来る猛スピードのまま、俺の横の地面を肩で滑って行った。

呆然と後ろ手をついたまま、首だけを背後へと捻る。

そこにはやっぱり見間違えではなく、あの道化師が横たわっていた。まさか、怒りに狂い過ぎて石にでもつまづいたのか？

そんな酷く間抜けな光景が頭の中に浮かび、少しの笑みが心に生まれた。

「おい……、さっさとこっち来い……」

緊張感の無い茶番を脳内で繰り広げていると、三度聞こえるコニーさんの声。

その声に我に帰った俺は這いずるような無様な格好で、そちらへと逃げて行く。

コニーさんは遠くから見えていたよりも酷く、その身から血を滴らせ

ていた。

「だ、大丈夫ですか？」

すがりつく様にそう問うと、コニーさんはまた、先程の様な笑みを浮かべた。

「ああ、俺は大丈夫だ……。それより下がっとけ」

そう言つてコニーさんは片腕で庇う様に、俺を自分の後ろへと押し退ける。

その行動の真意を汲み取り、倒れた道化師の姿を探る様に見遣ると、奴は既にその身を起き上がらせようとしていた。

何かを庇い、何かを気にしながらのようなその行動に少しの違和感を感じ、道化師の身体を見回す。

すると、ある一点におかしなものを見つけた。

外側の左くるぶし上辺りに、深々と突き刺さった一本の短剣。

それはどう見ても、先程俺がコニーさんに渡そうとしたあの剣であった。

何であんな所に刺さっているんだ？

そう思い、反射的に本来短剣が刺さっているべき地面を見るが、やはりその姿はなかった。

瞬間的に移動した剣の謎に、頭を悩ませながら呆然としてみると、やがて立ち上がった道化師が口を開いた。

「私としたことが、少し熱くなつてしまいましたね」

少しどころじゃないだろう。

内心でそう思いながらも、もちろんそれを言える様な状況ではなく、ただ事の成り行きをそのまま見守る。

しかしコニーさんはそうではなく、横たわった状態のままで道化師へと言葉を発した。

「少しじゃないだろう、あんなの。何がそこまで気に障ったんだ？」

声色に警戒の色を匂わせながら、まるで俺の気持ちを代弁した様な問い掛けに道化師は驚きの表情を浮かべた。

「なるほど、まだ生きていたのですか。それじゃあこれも、貴方の仕業ですね？」

そう言っしてしゃがみ込み、足に刺さった剣を苦痛の表情を浮かべる事無く、

何ともあつさりと引き抜いた。

真紅の血を滴らす刀身とは違い、その傷口からは何故か血が垂れる事はない。

「ああ、そうだ。結構痛かっただろう？」

肯定の意を示したその答えに、先程の謎が解ける。

あの剣はコニーさんがどうにかして、いや魔法で道化師へと突き刺したのだろう。

「まあ、多少は効きましたが。でも、抵抗もここまでですよ。もう村の人間も近付いて来ている。貴方達は今殺しておかなくては……」

道化師は気配を感じていたのか、彼が目線で示す方向にはランプと
思しき光がちらちらと揺らめいていた。

アイナさんにベントさんが助けに来てくれた。

そんな希望の心が生まれたのは一瞬、後に続いた言葉に俺は倒れた
ままのコーニーさんの服をぎゅっと握った。

あの二人がここにたどり着くまでに、俺達を殺して逃げることなど、
こいつには簡単なことだ。

こちらが対抗できる手段といえば、コーニーさんの魔法だけれど、そ
れすらも本人の表情を窺う限り望み薄であった。

形成逆転かと思いきや、全くもって何一つ、状況は逆転などしてい
なかったのである。

道化師はゆっくりと、右腕を天にかざした。

「それではごきげんよう」

掌へと光が集まり、まばゆい光弾を形成していく。

その光景に、俺はここにきて何度目になるのか、死を覚悟した。

しかし、それもまた恒例の如く杞憂に終わり、俺の命は終わること
がなかったのだった。

道化師の背後から、いななきと共に迫る一頭の馬。

繋がれた馬車が横倒しにならんばかりの勢いでターンし、その前足
を容赦なく叩きつけようとする。

「なっ……？」

その声に気付いた道化師は振り返り、それと同時に掌の光も闇に消えていった。

馬の一撃を間一髪でかわすと、道化師は体勢を崩し、地面へと転がる。

そしてそれによってできた俺たちとの間に、馬は漆黒の体を滑り込ませた。

「……なんですか、この馬は！」

体勢を立て直し、立ち上がった道化師は驚きの声を上げる。

しかし、馬の行動は俺にとっても予想外だった。

この馬は昔コニーさんに助けられたことによって、恩を感じ、忠誠心を持っている。

もしかしたらそういうことなのかもしれない。

そんなことを考えながら、道化師の様子を探ろうとするが、間に立つ馬車に遮られ、姿を見ることはできなかった。

「ありがとう……バート」

コニーさんはそう静かに呟き、目を伏せ、瞳を閉じる。

そしてそれに気付いたのか、名前を呼ばれた馬、バートはこちらをちらりと見ると、道化師を威嚇する様に鳴き声を上げた。

「馬の分際で……？」

焦りや苛立ち、そんな感情を含んだ声が馬車越しに聞こえ、それと同時に再び強い光が辺りを照らす。道化師が魔法を放とうとしている。そんな事実には身構えると、コニーさんが俺に口を開いた。

「馬車に掴まれ。俺は大丈夫だから」

「でも……」

このままでいたって何の役にも立たないくせに、とっさに反論をしよう。

「いいから行け！」

しかし強く促すコニーさんに従う他なく、俺は立ち上がった。急ぎ足で馬車へと駆け寄り、車輪に足をかけて側面へとしがみ付く。これからどうするのか。

その教えを乞うように後ろを見ると、コニーさんがそばに落ちていた石ころを掴み、それをバート目掛けて投げ付けた。

何故？ そんなことを思う暇もなく鳴き声とともにバートが勢いよく走り出す。

同時に揺れ動く馬車に、俺は必死にしがみ付いた。

少しスピードが乗った辺りで、バートはアイナさんとベントさんと思しき灯りの方へとターンし、駆けて行く。

これでコニーさんと道化師の間を遮るものは何も無くなってしまった。

本人は大丈夫と言ったけれど、一体どうするつもりなのか。

バートは俺が道化師の目に触れないような向きで旋回してくれたので、奴の様子はわからない。

けれど、コニーさんは相も変わらず地面へ伏せつたままだ。この馬車には道化師の目的のものが積まれている。

つまり攻撃は俺ではなく、コニーさんへと向かうのではないか。そんな心配に苛まれつつ、スピードを上げる馬車に、景色が後ろへと流れて行く。

次第に後方に現れた道化師の姿はまた、あの魔法を放とうとするものであった。

「コニーさん危ない！」

思わず飛び出た警告は道化師の耳に届き、渋い表情を浮かべる。

しかし、あの二人の距離ではコニーさんが道化師の動向に気付かない訳がない。

その筈なのにコニーさんは顔を上げる事は無く、一心に地面を見つめていた。

何をやってるんだ、全然大丈夫じゃないじゃないか。

そんな事を思った矢先、道化師の掌から光が放たれた。

「あつ……」

悲鳴を上げるでもなく、名前を呼ぶでもなく、そんな間抜けな声が自分の口から漏れた。

コニーさんへと着弾した光は煙を巻き起こし、辺りを幕のように覆っていく。

死んでしまったのか、それすらもわからなかった。

「嘘だろ……」

ぼつりと呟き、未だ実感を持ってない怒りをもって道化師を見ると、その視線が奴の冷たい目にしつかりと重なる。

そして、道化師は嫌らしくにつと笑い、そのまま闇へと駆けて行った。

近づく村人の灯りを警戒して退散したのか。

しかしそんな奴を追いかけることは今の俺にはできなかった。

やがて邪悪な気配の逃走を感じ取ったのか、バートは落ち着きを取り戻し、スピードを緩め、立ち止まった。

馬車から飛び降り、土の地面を踏みしめると、直ぐにコニーさんの元を見る。

未だ立ち込める煙は奇妙な渦を描き、星が瞬く空へと登っていた。そんな煙の妙な動きに違和感を持ちながらも、のし掛かる驚きと悲しみに足が動かない。

すると不意に背後を灯りが照らし、声が聞こえた。

「大丈夫？」

振り返るとそこには慌てた様子のアイナさん、そして渋い顔をしたベントさんが佇んでいた。

13・離れの魔術師

アイナさんは足早にこちらへと駆け寄ると、地面に膝を付き、目線を俺と同じ高さまで合わせる。

右手に握られたランタンが照らすその表情は心配と焦りに溢れていた。

コニーさんの危機だからというのが大半の理由なのかもしれないけれど、見ず知らずの俺にまでそんな視線を向けるなんて、きっとこの人もいい人なんだろう。

そんなことを改めて思った。

「怪我はない？」

ランタンを地面へと置き、空いた手を俺の肩に置くアイナさん。

言われて自らの体を見回すが、そこには少しの擦り傷と最早意味を成していない三角巾が、ぶらぶらとぶら下がっているだけだった。

思い出してみると、狼に噛まれたこの右腕、道化師と対峙していた時は痛みをあまり感じなかった気がする。

「えっと、大丈夫です。それより……」

大きな新しい怪我也無く、とりあえずの無事を知らせるが、問題は俺の方では無い。

目線で彼の場所を知らせると、アイナさんは急いで立ち上がった。

「ベント、この子をお願いね」

俺の面倒を任せられたベントさんはより一層の不快感を露わにする。そこまで露骨に表情に出されると、こちらまで嫌な気持ちになってしまう。

倒れているコニーさんの元へと走るアイナさんを見ながら、俺の心はまた更に沈んだ。

「あの……私たちも行きましょう」

少しばかり慣れてきた一人称でそう告げると、ベントさんは無言で頷き、アイナさんを追って歩を進めた。

それに続き俺もコニーさんとの距離を詰めて行く。すると前方から、先に辿り着いたアイナさんの声が聞こえてきた。

「だ、大丈夫ですか？ 師匠？」

地面に膝を付き、すぐる様に問うアイナさん。

煙が晴れたその場所にはまた、変わらぬ姿のコニーさんが血だらけで横たわっていた。

「なっ……？」

その姿を視認したベントさんは堪らず声を上げる。

まさかここまでの事になっているとは思っていなかったのだらう。

魔術師嫌いとは言え、流石に動揺したのか。

「大丈夫ですか？」

アイナさんの再びの問いに、コニーさんは身じろぎで答えた。
言葉を発する事が出来ないのか、それともその行動自体が辛いのか。
どちらかは分からずとも、あまり良い兆候だとは思えない。
けれど、未だコニーさんは生きている。
それが分かっただけでも、全身から力が抜けて行くのを感じた。

「ああ、そうだ……ち、治療をしなくちゃ……」

アイナさんもコニーさんの動きに安心したのか、次の手に出ようと
するけれど、その声は未だ震えている。

それに治療と言っても彼女、この場に持つてきているのはたった一
つのランタンだけで、道中身を守るものでさえ、ベントさんがいる
せいか手にしている様には見えない。

道具もないのにどうやって治療するのだろうか。

「えっと……緑豊かな草原、だっけ？」

いや、透き

通る湖だったかな？ ああ……ええと……」

少しの心配を帯びた視線でそんなアイナさんを見つめていると、地
面へと膝を付いたまま、呪文の様に言葉をぶつぶつと吐き出し始め
た。

一体何を呟いているのか、理解は追い付かない。

「あ、そうだ……。よし！」

思案する様な言葉を紡ぐのを止め、自らの頬を打ち士気を高めんとするアイナさん。

その瞬間周りの空気が一変した様な気がした。

「うわ……」

身体へと感じる妙な感覚に、思わず声が漏れる。

しかし場の雰囲気とともに、それは決して邪悪に感じるものではなく、むしろ心地良いものであった。

心の底の方から静かに沸き起こる優しい風に身を任せ、様子の変わったアイナさんを見つめる。

膝の上へと置いていた拳を解き、掌をコニーさんの身体へとかざすと、その手は淡く白い光を放ち始めた。

頭から爪先まで、そのまま掌を移動させて行くと、青白かったコニーさんの皮膚が健康的な血色を取り戻す。

そして一通りの治療が終わったのか、アイナさんは疲れた様に地面へと尻餅を付いた。

「あ、あの……コニーさんはもう、大丈夫なんですか？」

タイミングを見計らった様に、恐る恐る言葉を投げ掛ける。

アイナさんの表情、そしてコニーさんの様子をとって見ても、多分治療は

無事に終わったんだろうけれど、確証を得られなければどうにも安心出来ない。

「……うん、大丈夫よ。私は回復魔法には自信があるの」

そう言つて笑顔を見せるアイナさんに俺もまた、身体の強張りが解けたような気がした。

それにしても……。

魔法とはここまで便利なものなのか。

コニーさんが使っていたのはよく分からないけれど、少なくとも回復魔法ではなかった筈。

その便利さと共に、アイナさんが魔法使いであつたというのもまた驚きだ。

「おい、アイナ」

物思いに耽つてしていると、隣に立つベントさんからそんな言葉が飛び出す。

比較的乱暴な物言いにそちらを見ると、その表情は何とも不機嫌そうなものだつた。

「お前は魔法使いじゃあなくて治術師なんだ。それと、終わつたんならもう行くぞ」

まただ。

さつき助けを求めに行った時も、こんなような訂正をしていたはず。口調もなんか怒っているみたいだし、そんなに気になるのだろうか。

「またそんな事言つて、私は魔法使いよ。それと、とりあえずあの馬車に運ぶから手伝つて」

そしてまた例によってアイナさんの訂正。

あしらう様な言葉にベントさんは少しムツとするが、洪々コニーさんを運ぶのを手伝う。

地面へとしゃがみ込み、おんぶのような体勢でコニーさんを背負おうとする様だ。

やっぱり外見的にもがたいがいいし、大人の男性だとしても人を一人背負うぐらい簡単なんだろうか。

地面に寝たコニーさんをアイナさんがゆっくりと起こし、ベントさんへと預けようとする。

しかしその瞬間、今まで少ししか動かなかったコニーさんが、自らの意思で向けられたベントさんの背中を拒んだ。

「あつ、師匠！ 気付きましたか？」

その動きに気付いたアイナさんが声を掛けると、コニーさんはゆっくりと

立ち上がった。

「駄目ですよ師匠！ まだ安静にしてないと！」

ふらふらと立ち上がったコニーさんに、アイナさんが座る様に促す。確かにその様子、まだあまり具合が良くはなさそうだった。

「何だ、ピンピンしてるじゃねえか」

一体どこをどう見たらそういう風に見えるのか。

まあ、ベントさんにとって照れ隠し的なあれかもしれないけれど。
しかしコニーさん、アイナさんにもベントさんにも何も返事を返さないところが少し心配だ。

しかしそれも、直ぐに覆されることとなったのだけれど。

「ああ、死ぬかと思った……」

緊張感のない声でそう漏らし、勢い良く地面へと尻餅をつく様に座り込む。

「流石に少し調子に乗っていたかもしれないな」

言いながら背後の柔らかい草の地面へとその身を投げ出し、ごろんと仰向けに寝転ぶコニーさん。

年甲斐に無くなにやってんだとか、一回立ったのはなんだったのか、色々思うところはあられるけれど、俺の命の恩人だ、無事回復してよかった……。

「おおアイナ、来てくれたのか。助かったよ」

目線だけをそちらに向け、にこやかに笑うとその視線を隣のベントさんへと移す。

「それと一応お前にも礼を言わなきゃな。えっ……名前はまあ、あれだけど、とにかくありがとな」

絶対忘れていたなベントさんの名前。
まあ、忘れられた本人も怒るでもなく微妙な表情をしているから、
面倒なことにはならなそうだけど。

「でもまあ、良かったですよ。師匠が野盗にやられたって聞いたときは、ほんとビックリしたんですから」

野盗？ と一瞬疑問が湧くが、思い出してみれば俺がこの二人にそう伝えたのだった。

しかしコニーさんはそんなことを知らず、怪訝そうな表情を浮かべている。

察してくれ、そう祈るしかない。

「えーっと……そう、野盗だよ野盗、うん」

そんな祈りが届いたのか、コニーさんは俺の顔をチラリと見ると、
事態を把握した様にそう言った。

「しかし、魔法が使える癖にそこら辺の賊にやられるたあ、だっせーなあ」

そんな風に安心したのも束の間、今度はベントさんからの喧嘩を売る様な発言。

この人は怪我人相手になにやってんだか。

「お？ なんとか君、随分と挑発的だねえ。昼間の口論の続きでも

したいのか？」

コニーさんもコニーさんだ。

まあ、茶化すような言葉のおかげでベントさんもアイナさんもこれ以上その事について追求はしなさそうだけど。

でも、喧嘩にはなるかもしれないな。

ベントさんおでこに青スジたててるし。

「まあまあ、二人とも落ち着いて。とりあえず村に帰りましょう？
話はそれから……ね？」

間へと割って入ったアイナさんが二人、というかベントさんを上手く宥めると、村への帰還を提案する。

だがしかし、それに意を唱えたのは紛れもないコニーさんであった。

「ああ、俺とあいつは村へは帰らないんだ。悪いけどな」

今まで会話から完全に外され、蚊帳の外だった俺を指差し、コニーさんはそう言つてのける。

それに動揺したのはもちろん、弟子であるアイナさんだった。

「……えっと、どういふことですか？ 師匠……」

「どついつこつて言つかなあ」。まあ、そついつ運命だった、ていふ感じで」

コニーさんは思案する様に頭を掻きながら言う。

その真剣味のなさが気に障ったのか、アイナさんは少し語気を強める。

「真面目に説明してください！」

「ああ、すまん……。ちょっとこっち来い」

そんなアイナさんの台詞にコニーさんもしつかりと説明をする気になったのか、手招きで俺を呼び寄せる。

コニーさんが村を出て行くはつきりとした理由は俺も気になるところではあるし、素直にそれに従った。

「まあ、長くなるから掻い摘んで話すけど、この子はな……」

コニーさんは優しく、俺の頭へと手を置く。

そしてアイナさん達二人だけではなく、俺自身にとっても酷く衝撃的な発言をした。

「俺の娘なんだよ」

そんな風に妄言を吐き出したのだ。

何言ってるんだこの人は。

静寂の音が、林の暗闇にこだましたような気がした。

「……えっと、ちょっと待ってくださいよ師匠。今朝私が治療したこの子が師匠のお子さんだと……？」

大きな瞳を真ん丸と見開いたアイナさんの問いに、躊躇う間もなくコニーさんは頷く。

いや、ちょっと待ておかし。

俺にはこことは違う世界にちゃんと親兄弟がいるんだから、それはおかしいだろう。

何を勝手に得の無いホラを吹いているんだ。

「ええと、ちょっと頭が混乱してるのでその話は置いときましょう……。私が質問した事の答えではありませんし」

いや、個人的には置いといてもらっちゃあ困るんだけど。

ここで誤解を解かないと後に絶対面倒臭い事になるに決まっている。ただアイナさんはそのまま言葉を続けた。

「さっき私が質問したのは村に帰らないっていうのはどういうことか、ですよ師匠。話はそれからです」

俺が口を挟む間もなく、そう捲くしたてる。

なんて言うか、切り替えの早い人だ。

そんな感想を心の中で述べ、半ば場の空気に流される様に静観していると、ちよんちよんと肩を突かれた。

「いいか、取り敢えず俺に話を合わせろ。悪いようにはしない、い

いな？」

そんなことなく悪役臭い台詞を放ったのはコニーさん。
このなんとも胡散臭い誘い、果たして乗るべきなのか。

「どうかしましたか？ 師匠？」

「ん？ ああ、何でもないさ」

怪しむアイナさんにそう告げるコニーさん。

そして、その横でうんうんと頭を悩ませる俺。

ここで俺自身がコニーさんの娘であることを否定したら、一から素性を明かすことをしなくてはならない。

だけど、違う世界から来たっていう事実を隠して説明するのを前提としたら、話せる事は限られてくる。

それに話術がある人ならばともかく、俺なんかじゃ絶対にどこかでボロが出るはずだ。

ただでさえ隠し事で精一杯なのだから。

「それじゃ、説明してください。師匠」

ある種の決意を固めた俺の真横で、コニーさんはゆっくりと口を開く。

「じゃあまず、俺の奥さんが死んでるってのは知ってるか？」

そう言ってあからさまに心痛な顔をするコニーさん。

俺の母親となる人物まででつち上げるつもりなのだろうか。

「えっと……師匠、ご結婚なさってたんですね……。初耳です」

驚いたアイナさんとは違い、ベントさんは眉をピクリとも動かさず無関心無表情を貫いている。

そんな彼に少しの感心を抱きながらも、コニーさんの嘘とも本当とも取れる話へと耳を傾けた。

「まあ、お前が産まれる少し前に死んじまったからな。知らないのも当然だ」

そこで一呼吸置き、コニーさんは考え込むように頭を掻いた。この様子じゃあ、色々と嘘の話を必死で考えてる最中なのかもしれない。

まあ、今の俺には助け舟を出す事はできないけれど。と、そんな歯痒さのままに各々の表情を伺うと、ベントさんの眉がぴくりと動き、その顔がゆがんだように見えた。

まあ、何を言うわけでもないみたいなので、気のせいなのかもしれない。

「……だけどな、その死んだって

いうのはどうやら俺の勘違いだったらしいんだよな」

なんか急展開だ。

さっきの発言に不味いところでもあって、軌道修正に取り掛かった

のだろうか。

「勘違い……ですか？」

「そう、勘違い。もしかしたらあいつは生きてるかも知れない……。だから探しに行こう、って訳だ。俺とこいつでな」

そう言っただけ俺の頭へと手を置き、乱暴に撫でて見せる。

ただでさえくしゃくしゃの髪が更に乱れ、鬱陶しさが増す。亡くなったはずの妻を探すための親子旅。

コニーさんはそれを村を離れる理由にするつもりみたいだ。

「話は……わかりました。でも師匠、いくつか質問してもいいですか？」

アイナさんは無理矢理に納得したようで、そこから湧いた疑問を投げ掛ける。

「師匠が奥さんを探しに行く、っていうのは分かったんですけど、その子は今まで村では見かけませんでしたし、師匠の家にも居ませんでしたよね？　今までどこにいたんですか？」

話の際に鋭く突っ込んだ質問に、コニーさんの動きが石のように固まってしまった。

さっきまで顔に浮かんでいたへらへら笑いは見る影もなく、額に冷や汗をかいている。

一体どれだけ焦ってるんだよ。

計画的じゃなく、その場のノリで物事を進めるからこんな事になるんだ。

命の恩人でありながら、戦闘以外ではイマイチ頼りないコニーさんを少し呆れた視線で見つめると、それに気付いたのかこちらへと助けを求めるような瞳を向けてきた。

しょうがない……。

俺は溜息を吐き、口を開いた。

「あ、あのそれは私が説明します……はい」

やっぱり相変わらず人と話すのは苦手で、口調は何だか弱々しい。自分のことながら情けないけれど、アイナさんは恐らく男の時の俺と同じくらいの歳、緊張するのも無理はないんじゃないだろうか。同年代の女性って訳だし。

と、洪々説明を始めるために脳をフル回転させていると、もう喋ることはないんじゃないかと思う程に黙りこくっていたベントさんが、久し振りに口を開いた。

「その前にちよつといいか？」

淡々と感情を乗せずに発せられたその声に、俺の心が少し後ずさる。口を開いたと思えばこの威圧的な態度、ベントさん一体何を言うつもりなのか。

「あ、はい……どつぞ」

「アイナが生まれる少し前に、じじいの奥さんが死んだって言ったよな？」

その問いに恐る恐る頷き、言葉を促す。

しかしそれに答えた言葉は俺とコニーさんにとって、何とも嫌なものであった。

「でも、それじゃあ計算が合わねえよなあ。お前そんなちっこい見た目で、実はアイナより年上ですってか？」

あ、やばい。

一瞬見たただけだから定かではないけれど恐らく、今の俺の身体は少なくとも中学生……いや、小学生程なのだ。

そんな風に思ったと同時に、背中へと冷や汗がつつたう。

コニーさんへと批判の視線を惜しげも無く送ると、必死に取り繕うように彼は弁明を始めた。

「んーまあ、だからな……つまり、その……」

何とも歯切れの悪い言葉を繰り返し、中々言葉を捻り出せないでいるコニーさん。

しかし助け舟を出そうにも、俺だっていい考えが浮かんでいないわけではない。

全く持って、面倒で大変な事態だ。

ベントさんとアイナさんの顔はどんどんと険しくなっていく。

「ああ、くそ！」

強く吐き捨てられた声とともに、辺りの空気が一変した。

また魔法か？ 直感的にそう感じたが、この状況でのその選択の真意が図れない。

すると張り詰めた空気が和らぎ、緩やかな風が吹き始める。

その流れの中に、まるで蝶の鱗粉の様な光輝くものが見えた気がした。

「……あれ？」

その幻覚とも取れる何かに目を奪われていると、アイナさんのそんな声が聞こえた。

何かと思いそちらを向くと、まるで支えを失ったかのように彼女は地面へとへたり込んでいた。

「お、おい！ どうしたアイナ！」

すぐさまに駆け寄り、心配気な声を掛けるベントさん。

一体どうしたのか、俺は呆氣にとられることしかできない。

乱暴に揺する手を止め、ベントさんは安心した様に息を漏らした。

未だ倒れたままのアイナさんを見て何かに気づいたのだろうか。

「……じじい、これお前がやったんだろ？」

「ん、ああそうだ」

鋭く刺さる視線を物ともせず、コニーさんは答えた。

何でそんなことをしたのかはわからないけれど、やっぱりさっきの魔法らしきものは幻覚ではなかったみたいだ。

そしてその返答を聞いた途端、ベントさんは物凄い勢いでコニーさんへと詰め寄った。

「お前何やってんだ？ 今度こそちゃんと説明しろ？ 意味わかんねえんだよ？」

つんざくような大声に堪らず両手で耳を塞いだ。

襟首を掴まれ、ガクガクと揺らされるコニーさんも堪らずに両手でそれを制す。

「落ち着けて！ お前の察しが悪いからこんなことになったんだろっが！」

何ともよく分からない理屈をぶつけるコニーさん。

元はと言えば彼が練りもしない嘘で場を切り抜けようとしたから、こんなことになったのではなかったのか。

命の恩人だとしても、擁護し難い。

「はあ？ どういう意味だよ？」

「だから、俺はアイナに掟を隠しつつ村を抜け出そうとしてたんだよ！ どう考えたってそういう事だろうが。……ったく」

掟？

そう言えば村を出て行く理由をしつかりと聞いていなかったけど、その掟とやらが動機なのか。

小さな村に独自の掟、何ともありがちだ。

「掟？ あ、あの掟のことか？」

「……そうだよ」

素っ気無い返事に、ベントさんは決まりの悪いような顔で眉をひそめた。

「そんなの言わなきゃわかんねえだろうが？ お前がちゃんと説明してたら俺だってどうにかできたさ？」

「……説明したらって、アイナのいる場でアイナにばれないようにどうやって説明するんだよ？」

「そんなの魔法とかでどうにかできんだろ？」

「魔法なんか使ったらアイナに気付かれるだろうが。あいつだって魔法使いなんだ。……これだからバカは」

少しずつ幼稚にヒートアップしていく二人の言い争い。完全に置いてきぼりをくらってしまった。

下手したら一回りくらい年齢の違う相手に、一体なにをやっているのかこのおじさんは。

これはそろそろ仲裁に入ったほうがいいかもしれない。

「あ、あの、それよりアイナさんは大丈夫なんですかね？　ずっと倒れたままですけど……」

タイミングを見計らいそう問うと、未だ首根っこを掴まれたままのコニーさんが疲れたような顔だけをこちらへと向けた。

「ああ、死んじやいねえよ。ただ寝てるだけだ」

死ぬって……

そりゃさすがにこっちも殺したとは思っていない。

まあ、それでも寝てるだけなら取り敢えず心配はいらないみたいだ。二人から隠し事をされてるってのは可哀想だけれど。

「というわけで、俺達は旅に出る。お前はアイナを村まで運んで、適当に誤魔化しておけよ」

ベントさんを押しのけ立ち上がりながら、コニーさんはそう告げた。もちろん様々な反論が飛んできていたけれど、まるで聞こえていないかのように、コニーさんはこちらへと歩み寄る。

「ちょっとばかり油断しすぎてた。すまん、悪かった」

俺の頭をくしゃくしゃと撫でながら小声でそう言った。

素直な謝罪に少し拍子抜けしながらも、自然と笑みが零れた。

「おい、ベント。ちょっと危険な感じになってきたからな、その剣一本くれ」

無視された怒りから再び掴みかかろうとしていたベントさんに、そうぴしゃりと言つてのける。

旅の途中の武器にでもするつもりなのだろう。

しかし、いくら魔法が使えるとはいえ、剣の一本くらい持つてきておくべきじゃなかったのか。

腰に差さっている短いナイフだけでは心許ない。

「なんで俺がじじいに剣をやらなきゃなんねえんだよ」

案の定ただでは渡さないベントさん。

コニーさんは予測していたのか、ため息を一つつくとすぐに言葉を返した。

「頼む。そうしてくれれば俺はもう、あの村には帰らない」

「だからってなん……」

言葉を遮り、コニーさんは語気を強める。

「魔法使いはもうあの村には寄り付かない」

どういうことなのか。

俺には分からないけれど、その言葉を聞くや否やベントさんは渋々、自らの剣の二本の内一本を差し出した。しっかりとそれを受け取り礼を言う。

「……じゃあな、二度とくんじゃねえぞ」

ベントさんはそう言うと、アイナさんを抱き上げ村へと帰って行ってしまった。

残されたのは俺達二人と、闇の静寂。

「それじゃあ、行くか。今度は大丈夫だ」

剣を腰へと納め馬車へと歩き出す。

俺は返事をするに静かにその後を負った。

14・掟の犠牲者

色々ごたごたが解決していない様な気がするけれど、俺は再びあの馬車に揺られていた。

出来るだけ奥の御者席近くに陣取り、数ある本を防護壁に要塞を築く。

出発直後は道化師の影に怯え、警戒していた俺たちも今は少しばかりの落ち着きを取り戻していた。

最も剣を手にしてから何故か強気になったコニーさんとは違って、俺はまだヒビっているけど。

しかし、本を動かしたせいか随分と埃っぽくなってしまった。喘息持ちではなくて本当に良かった。

一息つき、壁へと寄りかかる。

どうしてか流されるがままに命の危機を経験したら、異世界を旅することになってしまった。

まるで現実ではない様な感覚が何とも気持ちが悪い。

未だ原理もなにも分からないとはいえ、なんだか不思議な力まで手に入れてしまったみたいだし。

「コニーさん、その色々聞きたいことがあるんですけど」

「なんだ？」

考え、警戒することにも疲れ、いくつかの謎の解決を目指し質問を試みることにした。

まずはやっぱり、あの道化師。

「さっきの道化師はコニーさんのお知り合いですか？」

絶対にそんな訳はないけれど、うまい言葉が見つからずにそのままストレートに問う。

案の定コニーさんは苦笑いを浮かべた。

「そう見えたか？」

「いや、見えませんでしたけど……」

何だか可笑しく、こちらも乾いた笑いを返す。

するとコニーさんは奴の話題から俺の話題へ、こう言葉をつなげた。

「どっちかっていうと俺はお前と関係のある奴だと思ってたんだけどな。あいつに追われてお前は村にやってきた、とか思ってたんだぜ？」

馬の手綱を握りながら、こちらへとちらりと目線を送る。

そうか、コニーさんにとっては俺だって素性が知れない奴。

そういう考えが自然なのかもしれない。

「いや、私もあの人とは初対面ですよ。命を狙われる理由だって心当たりはありません」

「ま、そうだろうな」

一応、道化師との関係はきっぱりと否定しておく。

しかしこれで、俺達二人ともあいつとの関わりは全くないという訳だ。

こちらが知らないだけで一方的な恨みを向けられているのだとしても、俺はこの世界に来てから大したことはしていない。

そうなると必然的にコニーさんが恨まれてる、ってことになるけど、それもやっぱりなんか違うような。

うんうんと頭を悩ませていると、再びコニーさんが声をかけてきた。

「でも、そうするとよ、もう一度聞くがお前は何であの村に来たん
だ？ あそこの近くには別の村も町もないし、迷子って訳でもない
んだろ？」

しまった。

俺は小さくため息を着くと、少しの熱を帯びた額に手を当てた。

またしてもでっち上げなくてはならない事柄ができてしまった。

頭の回転にあまり自身のない俺は言葉を紡げずに口ごもる。

焦りから出る冷や汗が手の平を湿らせ、更なる混乱を招いた。

「まあ、また後回しでもいいさ。事情なんてそれぞれあるもんだし
な。いつかまた聞く事にするよ」

もう本当の事を言ってしまうおうかと思ったその時に、降り掛かった
声。

思考から開放され、俺は腕をだらりと投げだした。

深く追求されなくて良かった、その安堵感が全身を包んだ。

「だけど次にする三つの質問にはしっかりと答えてもらうからな」

しかし安心も束の間、コニーさんはそんな事を意気揚々と、何とも楽しそうに言つてのけた。

そして俺の返事を聞く間もなく、その質問は開始された。

「まず、その一。これは最重要事項。今まで聞かなかったのが不思議なくらいだ。お前の名前は？」

簡単に答えられる質問よ来い！

そう祈っていたが、どうやら通じなかったようだ。

柏木正一、そう答えれば簡単だけれど今のこの姿には似つかわしくない。

というかこの世界自体にどうやって馴染める訳がない名前だ。またもやえーとかあーとか、場繋ぎの言葉でお茶を濁すと、コニーさんは呆れたようなため息を着いた。

「名前ぐらい答えられるだろう……。まあいい、じゃあそれは後回しだ。その二、お前の年齢は？」

これまた元の世界にいた時のプロフィールでは通じない。

だけど先程の質問よりはいくらか答えやすいものだ。

この質問には切り札がある！

俺は自信満々に言葉を返す。

「いくつに見えますか？」

そう、この言葉だ。

これを言ってしまうえば自動的に、相手が俺の外見に相応しい年齢を導き出してくれる！

質問にちゃんと答えを返せたのが久しぶりで、俺はニヤニヤと気持ちの悪い笑みを浮かべた。

「ああ？ …… まあそうだな、言動はちょっとませてるけど、ほらあれだ、9歳だ9歳。そんぐらいだろう？」

よしやった！

今の俺の容姿から見てどうやらそれくらいが妥当みたいだ。
この体になってから初の個人情報を手に入れ、小さくガッツポーズをする。

と、同時にそれほど外見年齢が下がってしまったという事実、少しの悲しみを覚えた。

「はい！ じゃあそれをお願いします！」

「なんか急にえらく元気になったな……。よし、じゃあその三、最後の質問だ。好きな食べ物は何？」

どこから来たのか、とかその類のものが来ると思っていた俺はその質問に拍子抜けをした。

まあ、答えやすいものであるから構わないんだけれど。

「えーっと、好きな食べ物はどうですか？」

正直に答えるが、言葉を発した瞬間にふと気付く。
あれ、もしかしくなくてもこの世界にはうどんなんてないだろう。
あ、しまった。

「うどん？　なんだそりゃ？」

「ああ、いやえーっと、あれです、ほら！　麵的な奴ですよ！　こ
う、麵的な！　私の故郷の料理なんですけどね！」

慌てて取り繕い郷土料理的なものに仕立て上げる。
それが功を奏したのか、コニーさんはさして興味もなさそうに「な
るほど」と呟いた。

「まあ、それは置いておいてだ。名前の質問に戻るぞ」

げ、戻るのかよ。

口には出さずとも、コニーさんに見えていないのをいい事に、露骨
な渋い表情をした。

「事情は知らんが名前を明かしたくないってのはわかった。だけど
街までの旅の間、お前は俺の娘という事になる訳だから……」

「え！　その嘘まだ続くんですか？」

堪らずに言葉を上書きすると、コニーさんは当然だと言わんばかり
の声色で、肯定の意を示した。

「そこでだ、俺がお前の名前を考えてやる。所謂偽名ってやつだな」
何とも勝手なことだけれど、これは俺にとっては有難い。
二つ目の個人情報ゲットのチャンスなのだ。
うどんを入れれば三つだけだ。

「……あ、じゃあお願いします」

あまり乗り気なもの癪なので、渋々といった演技を施す。
背中越しに見える首が満足気に頷き、いよいよ俺の名前が発表されてしまう。

頭の中で、ドラムロールが鳴った気がした。

「ノーラ。今日からお前はノーラ・ブラントだ！」

いい名前……なのか……？

少なくともすごく変な名前ではないけれど、何とも反応が難しい。
それを感じ取ったのか、コニーさんはむすっとした顔をこちらへと向けた。

「なんだ？　おい、反応が薄いぞ？」

「……まあ、いいんじゃないですかね。それで」

とはいえ、別に否定する理由もない。

素直に受け入れる事とする。

これで、名前や歳くらいなら聞かれても問題なくなったのだ。

出身とかだつて、コニーさんの娘という事ならばどうとでもなるだろう。

「じゃあ、それで決定だな」

嬉々と返事をして、馬を操るのに意識を向ける。

それにしてもなんで、こんなにも親子の設定をコニーさんは引きずっているのだろう。

アイナさん達の前でなら、不審人物である俺を庇ってくれたという事で一応説明がつくけれど、街へ行く間であれば別にこの設定は必要がないのではないか。

まあ、念の為という事かもしれないけれど。

「という訳で話はもうこんぐらいにして、お前はもう寝とけ。疲れただろ？」

そう言われて思い出す、確かに眠い。

だけど、もっと疲れているだろうコニーさんを放って俺だけ寝てもいいものか？

「いや、その確かに眠いですけど、あの道化師がまたやって来るかもしれないですし……」

「ああ、もうその辺については心配いらなげ。この俺が剣を手
取ったんだ、もう不覚はとらねえよ」

そう自信満々に言つてのける。

またまたよく分からない理屈だ。

コニーさんは魔術師なんだろうし、魔法のほうが得意なんじゃない
だろうか。

剣を持つて戦う姿を想像できないほどに貧弱な体をしている訳でも
ないけれど、やっぱり魔術師が肉弾戦を繰り広げるのはイメージし
辛い。

しかし、反論しようとする俺の言葉を聞く前に、コニーさんが口を
開いた。

「それに万が一、万が一にでも俺が負けるような事があつてもだ。
時間稼ぎすらできないほど俺はやわじゃない。その隙にお前はへん
てこな魔法で逃げればいい。だろ？」

へんてこな魔法。

そう言われて、一瞬頭の中に疑問が浮かぶが、すぐに思い当たる。
悪魔から押し付けられたであろう、あの謎の瞬間移動魔法だ。

そうか、あの戦いの中でコニーさんも俺がそれを使う瞬間を目の当
たりにしていたのか。

話を切り出してこないところからみて、目撃はしていないのかと思
つていたけれど。

「ああ、でもあれは不確定要素というかなんというか……。私もま
だよく理解してないっていう感じでして……」

「話はここまで、そう言っただろう？　子供はもう寝とけ」

話を遮られたその瞬間。

ゆっくりとまどろみが加速していく。

眠い、果てしなく眠い。

まぶたは俺の意識と切り離され、自動的に閉じていく。

「おやすみ」最後に聞こえたのはその言葉であった。

そしてそこから目覚めた時、もう太陽は空高く天辺にあがっていたのだった。

まるで漫画やアニメの様な小鳥のさえずり。

差し込む光が眩しく、ゆっくりと目を開くと、明かりに照らされた埃が鼻をくすぐった。

起爆剤となったそれが盛大なくしゃみを引き起こすと、更に埃が舞う。

これでは悪循環、負のスパイラルだ。

俺は寝ぼけ眼で本のを要塞を崩すと、重い身体を引きずり馬車の外へと這い出した。

「おう、やっと起きたか」

そこにいたのは焚き火跡らしきものの周りに座るコニーさんだった。俺はその姿を洗い顔で睨み付ける。

「……コニーさん、昨日のあれ。催眠的な魔法ですよね？ アイナさんに使ったのと同じような」

「ああ、そうだ。ぐっすり眠れただろう？」

まるで悪びれる様子などない。

ここは一つ、きっぱりと言っておいたほうがいいだろう。

「まあ、それは否定しません。けど、勝手に魔法かけるのやめてもらえませんか？ あまりいい気分はしません」

「ああ、すまん。以後気を付ける」

返答に改善の兆しが見出せず、俺はため息を着いた。

まあ、とりあえずそれは置いておくとして、ここは一体どこなのだろうか。

そう思い辺りを見回すが、昨日からずっと見続けている森とさして変わりがない。

「あの、向かっている街にはもう結構近付いてるんですか？」

「いや、まだまだだな。取り敢えず街道には合流できそうだから、そこを辿って行くと後一週間くらいだな」

そんなに掛かるのか。

ちよっと隣町へ行くみたいな感覚で、下手すりゃ一日も掛からずに着くのかと思っていた。

……あれ？ でもこの世界の一週間は果たして七日なのか。

「変な質問かもしれませんが……一週間って何日ですか？」

「そりゃ七日に決まってるだろう」

一週間は这个世界でも七日か……。

静かに落胆の表情を浮かべると、コニーさんは直ぐそれに気付いた。

「なんだ？ 不満か？」

首を横に振り否定するが、どうやら先を急いでるのかと勘違いされてしまったらしい。

「まあ、街道をそれればもっと早く着くけどな。それじゃあ魔物にも襲われるわ、そこら辺の野生動物にも襲われるわでめんどくさい事になるぞ？」

魔物。

さらっとカミングアウトされたその言葉。

だいたい予想はしていた、けれどやっぱりそんなものがあるとなると、道中あの道化師だけでなくそいつらまで気にしなくてはならない。

ああ、もう、命を脅かすもの達のオンパレードではないか。

「いや、いいんです……。そのまま街道を言うてください」

力無くそう返すと、コニーさんは少し不思議そうな顔をしていた。とりあえず、この落ち込んだ気分をどうにかしよう。

そう思い、何か気を紛らわせるものを探すと、ある欲求に気が付いた。

その欲求へと意識を向け、手の平でお腹を撫でる。

そう、腹が減ったのだ。

思えば相当長い間、食べ物をお口にしていなかった。

これでは魔物に出会う前に生き絶えてしまうのではないか。

「あの……コニーさん。色々良くして頂いている身で申し訳ないんですけど、その……お腹が空きました」

非常に低姿勢で懇願するようにそう言うと、それをおふざけと感じ取ったのか、コニーさんの表情が和らいだ。

別にふざけたつもりはなかったけれど、少しやりすぎたか。

「まあ、そうだろうな。昨日からなんも食ってないんだろ？ ほらよ」

コニーさんは傍から何かを取り出すと、それをこちらへと放り投げた。

とっさの事にかろうじて受け止めると、休む間もなく、また一つ何かが飛んできた。

そちらも俺にしては脅威の反射神経でなんとか受け止める。

やっと落ち着き手元を見ると、それは二つともやはり食べ物であるようだった。

一つは焦げ茶色をした、何とも堅そうなパンらしきもの。
そしてもう一つはカラツカラに干からびた、干し肉と思しきものであった。

やっぱりこの世界、旅の食糧といえばこんなものなのだろう。
一つ礼を言つと俺は馬車の縁に腰を掛け、足を下へと投げ出す。
そしてカチカチのパンに勢い良く歯を立てた。

「……堅い」

堪らず呟き、一度それを口から離す。

これは少し食べるのに骨が折れそうだ。

小さくちぎる事もできず、何度も何度も噛み続けていると、唾液でふやけたおかげでやっと噛み切る事ができた。

味は……まあ、不味くはない。

だが決して、上手くもなかった。

干し肉に期待することしよう。

しかし、そちらも結局は同じように苦勞することとなった。

けれど、味に関して言えば現代人の口にも合う、美味しいものだったので苦勞したかいもあったというものだ。

「どうだ？ 美味しいか？」

「はい」

返事をし、差し出された水を受け取ると直ぐに喉を潤す。

干し肉、パン、水、その三つを交互に口にし、俺は時間を掛けて全てを完食した。

ほっそりとしていた幼いお腹が、少し膨れた気がした。

「あの、コニーさん。また少し聞きたい事があるんですけど」

食後の休憩も兼ねて、昨夜の様に質問をしてみる事とする。

やっぱり情報を手に入れておく事はこの先も重要になるであろうし。それに、この陽気だとぼーっとしていれば、またすぐに寝てしまう。寝起きだというのに。

「なんだ？」

「私も答えていない事があるので、コニーさんも答えなくなかったら別にいいんですけど……その、掟、ですか？ コニーさんがベントさんに言っていた掟って言うのが何なのか、ちょっと気になりまして……」

自分は情報を出さずに、相手に情報を催促する。

少し図々しくもあつたけれど、コニーさんはそんなことを気にするでもなく、あっさりと掟について話してくれた。

「実はあの村長の家には代々伝わる文献だかなんだかがあるらしくてな。それにはバルタサールの魔術送りっていうもんについて書かれてるらしいんだ」

「魔術送り？」

コニーさんはゆっくりと頷く。

「で、魔術送りつてのは村にとどまる魔術師の数を二人以上にはしてはいけないう内容なんだよ。二人以上になつたら、二人共村の外に送り出す。んでもって、バルタサルつてのはあの村長のご先祖様な。バルタサル・アルヴィドソン、村を作ったやつだ」なるほど。

何だか難しい話だけど、とにかくその掟のせいでコニーさんが村を出ていかなくはいけなかったのはわかった。

あれ？ でもそうすると、それは俺が魔法使いみたいな格好でうるついていたせいって事なんじゃないのか？

その考えに至り、どくと心臓が脈を打つ。

しかし、直ぐにまた新たな疑問が生まれた。

「あの、でもアイナさんも魔法使い、魔術師ですよ？ それだつたら私が来る前に、アイナさんとコニーさんが村を追い出されるんじゃない……？」

「ああ、しっかりとルールに則れば、そういう事になるな」

ルールに則れば、強調されたその部分に疑問符が浮かぶ。

コニーさんは頭を掻き、渋い顔を浮かべながら説明を始めた。

「アイナはあの村長の娘だからな、追い出したくなかつたんだろ。回復魔法を使えるのをいいことに、村の奴らにも、わしの娘は魔術師じゃあなくて治術師だー、とか訳わかんねえ事言つてたからな」

ああ、ベントさんが言っていたのはそういう事だったのか。

それにしてもあの村長、最初に会った時は普通にいい人だと思っただのに。

「あの村長さん、あまりそんな風には見えませんでしたけどね」

「まあ、あいつは娘を手元に置いておきたいのと同時に、俺を村から追い出したかったみたいだな。お前を最初歓迎したのも、俺に面倒を見る様に頼んだのも、俺達二人まとめて追い出すためだったんだろう」

その説明にやっと胸のつかえが取れた気がした。大人の汚い部分を聞いてしまった以上、気分的にはプラマイゼロだけれど。

ふと顔を上げると、こちらへと歩み寄るコニーさんが見えた。

「すまん、ガキにする話じゃなかったな」

そう言つて、俺の頭を乱暴に撫でる。

聞いたのはこちらだというのに、何故か謝られてしまった。

やはり見た目相応に子供扱いされているという訳か。

一つため息をつき、俺は馬車の奥へと入る。

「よし、そろそろ行くか」

コニーさんが御者席に乗り込むと、馬車が軋み、音を立てる。穏やかな森にバートの嘶きがこだまし、車輪がゆっくりと回り始めた。

15・赤髪の友人

それからしばらく、何と単調な日々であっただろうか。時折ある刺激でさえも、心地良い娯楽ではなく、血生臭い光景だった。

とはいってもあれから三日、魔物や道化師に出会うことは無く、現れるのは迷い込んで来た野生動物のみ。

大人しく街道を進んでいたというのに、結局のところ出会ってしまったのだ。

何とも運のない事である。

そしてその野生動物、小さな猪はコニーさんの手によって器用に捌かれ、今は肉片となつて幌の枠へと吊るされている。

進むにつれぶらぶらと揺れるそれを、俺は今日もまたぼーっと眺めている。

そう言えば、俺がこの世界に来て始めて見た狼、あれはどうやら魔物であつたらしい。

特徴を伝えただけで、コニーさんが直に見た訳ではないから確定ではないけれど、背筋のゾツとする話だ。

そしてもう一つ変わった事といえば、夜中になるとコニーさんが馬車の外で何かをしているという事だ。

何か、といつても別に悪に手を染めてるとかそういうのじゃないんだろうけど、布越しに見える淡い光のせいで何度か安眠を妨げられてしまっているのだ。

その程度で怒っているという訳ではないけれど、少し興味が沸く。魔法でも使っているのだろうか、今度聞いてみるとしよう。

「おい、そろそろ着くぞ」

背後から声を掛けられ、馬車の前方へと振り返る。

隙間からコニーさんの横へ顔を出すと、小さな村が見えた。街では無く村。

そう、目的地では無くその中継地点のメラン村だ。

咄嗟の出発だったので、あまり持ち出せなかった食糧などを補給するらしい。

ガラガラと車輪が音を立て、村の入り口へと近付いて行く。

関所や門といったものは無く、簡易の柵の様なものが格子状に張られていた。

そしてその傍らには槍を持ち、革でできた簡素な防具を身に付けた村人が立っている。

決して敵意ある者ではないが、俺は無意識に本の影に身を潜めた。馬車が村人へと近付く。

こっそりと見遣るとその人は軽く会釈をただけで、無言のまま俺達を迎え入れた。

「意外と簡単に入れるんですね」

再び前方へ顔を出し、率直な感想をぶつける。

コニーさんは傍らに飛び出た頭に軽く反応を示すと、直ぐに前を向き口を開いた。

「まあ、ああいうのは魔物対策に置いてあるだけだからな。ここら辺なんて基本的に平和なもんさ」

成る程、やっぱり魔物っていうのは普通の人々にとっては脅威なのだろう。

確かにあんなものが飛びかかってきたら、たまったもんじゃない。思い出しながら頭を掻くと、馬車はある一つの建物の横にゆっくりと停車した。

御者席から降りるコニーさんを見て、俺も取り敢えず馬車から降りる。

中途半端な高さが少し膝に響きながらも、ぱんぱんとロープを叩いた。

この世界に来たばかりの時はまるで新品の様に純白であったこの服も、たったの三日でところどころがくすんでしまっていた。

まあ、味が出たとも思っておこう。

その味わいを増した衣服から吐き出されて宙を舞う埃は、真横の建物へと流れていく。

比較的頑丈そうな煉瓦の壁に、木材の屋根を被った建築物。

回り込んで見てみると、少しばかり横に長く伸びるその建物の扉近くには一つの看板が下がっていた。

まじまじと見つめるが、やはり字を読む事は出来ない。

まるでミミズが這ったようだ。

「宿屋って書いてあるんだよ」

声が聞こえた方を向くと、すらりと伸びる綺麗な茶の髪が目に見え、飛び込んできた。

それはうさぎの様に嬉しそうに飛び跳ねると、宙を舞う。

視線は俺と同等、にんまりと笑顔を浮かべる女の子が立っていた。

小さくなってしまったのは自分であるのに、目の前の女の子が拡大されている様な、嫌な違和感を覚えた。

「あ、そうなんだ……ありがとう」

敬語を使うのも変なので、適当にお礼を言っておく。

こんな小さな子でさえ、緊張してしまう俺は少し病気が。

礼を言われ、嬉しそうににっこりと笑った少女に俺は苦笑いを返す。

子供はあまり得意ではないのだ、嫌いな訳じゃあないんだけど。

そんなおよそ似つかわしくない引きつった笑みを浮かべていると、目の前の少女の頭に何者かのげんこつが食らわされた。

「あんだだって字が読める訳じゃあないでしょうが」

振り下ろされた拳を辿り、その主の顔を見上げる。

俺達二人よりも少し大きい、気の強そうな女の子がそこにいた。

「もお、殴ることないでしょ！ お姉ちゃん！」

殴られた少女は頭を抑え、ぴょんぴょんと地面を跳ねる。

材質は麻か、可愛い刺繍の施されたスカートがふわりと広がった。

「はいはい、ごめんなさいね」

傍から見てもわかるような気のない返事をする姉と呼ばれた少女。推察も何もあったもんじゃ無いけれど、恐らくこの二人は姉妹なのであろう。

よく見てみれば、姉は背中あたりで一つ結び、妹はストレートと違いはあれど、一際目を引く赤茶けた髪にそれから目元、とても良く似ている。

まあ良く似ているといえど、それは外見に関してだけ見ただけで。

妹の方は九歳ぐらいにして字も読めないみたい……ああ、でもそれはこの世界の識字率がそれほど高くないのかも。と、そこまで考えて疑問が浮かぶ。

先程妹さんは看板の字が読めていたではないか。そんな考えから妹と看板を交互に見遣ると、その行動の意味に気付いたのか、お姉さんがある場所を指差した。

「ああ、なるほど……」

堪らず漏れる納得の声。

お姉さんが指差したのは看板に書かれた文字の少し上。

分かってしまえば簡単な事、そこにはベッドの中ですやすやと眠る、猫と思しき謎生物が描かれていた。

ちよっとわかり難いけれど、この絵が宿屋の証なのだろう。

というかこの子達はこの村の人だから、元から知っていたのかもしれないけれど。

「ね？　ね？　すごいでしょ！　これ、私が描いたんだよ！」

ぴょんぴょんと可愛く飛び跳ねながら、小さな指で絵を指差す。

やっぱり歳相応の絵、あまり上手とは言えないけれど、別にそれをそのまま突きつける必要もないだろう。

そう適当に返事をしようとしたその時、後ろから聞こえてきたのは

コニーさんの声だった。

「おー、上手い上手い！ 俺、猫好きなんだよ。な？ ノーラ」

遠くを見るようなポーズで目の上に手を当て、おどけてみせるその姿に俺達三人の視線が注がれる。

な？ とか言われても知らないよ、そんな話。

「おじさん……だれ？」

「ん、おじさんはこいつのパパだよパパ」

何故か得意気なその姿を見て、俺は小さく溜息を吐いた。
まあ了承をしてしまった以上、この設定はこの先絶対なのだろう。
もう気にする事もない。

「と、いうことで君たち。おじさん達はちょっとこの宿屋に用があるんでね、悪いけど失礼するよ」

そう言つて踵を返し、ドアを開けるコニーさん。

宿屋に用ということはやはり、今晚はここに泊まるのであろう。

物資を補給したら直ぐに出るのかと思つていたけれど、そうもいかないのだろうか。

彷徨う視線が姉妹を捉え、軽く頭を下げると俺はコニーさんの背中へと続いた。

「じゃあ私達も帰ろっか？ お姉ちゃん」

背後から聞こえた声と近づく足音。

そしてその音は俺の真横で、赤髪の少女へと変わった。
につこりと笑みを浮かべながら両手を後ろで組み、楽しそうにこちらを見つめてくる。

そう、先程まで話していたあの妹さんだ。

彼女は「帰る」と言っただけで、俺とコニーさんが入ったのは宿屋、そして彼女達もその後が続いてきた。
ということとは？

浮かんだ疑問はコニーさんによって投げかけられた。

「ん？ お嬢ちゃんたちも宿に用なのかい？」

後から着いてきていた姉の方が、その質問に答える。

「用というか……、ここ私達の家なので」

やっぱりそういうことだ。

看板の絵も妹さんが書いたと言っていたし、別に驚く事ではない。
むしろ予想出来たであろうことだ。

しかし、一方のコニーさんは何故か少し驚いているようだった。

「ん？ 君達ここに住んでるの？ 居候かなにかかい？ ……いや、
あいつがそんなことするわけないか」

何とも煮え切らない言葉に返事したのはやはり姉の方だった。

「いえ、母がやってる宿ですから……」

問い詰められる事に何か違和感を感じたのか、彼女の眉間に小さなしわが寄る。

しかし、不審を抱いているのは彼女だけではなかった。

一体何故、コニーさんはそこまでの疑問を露わにしているのだろうか。

頭を捻ったところで答えが出るわけでもなく、コニーさんの行動を見守っていると、彼は怪訝そうな顔ですぐ正面の宿屋のカウンターへと詰め寄った。

しかし俺達が入店しても誰も出て来なかった事から分かる通り、そこに人影はない。

「あー！ すいませーん！」

コニーさんがカウンターから身を乗り出し、声を上げる。

しかし奥にある部屋からの反応は無く、仕切りに使われている暖簾が揺れる事もなかった。

おかしい、そんな風な表情でコニーさんは首を捻る。

主人は留守なのか、そう問おうと姉妹の方へ首を回すと俺が聞くよりも早く、姉がコニーさんへと歩み寄った。

「多分上にいると思うんですけど……」

そう言ってカウンター脇にある木製の階段を指差す。

ぎしぎしと音が鳴るのが容易に想像できるような、そんな階段だ。

ありがとう、と言呟いてコニーさんが段差へと足を掛けると、案の定使い古された木材がぎしりと悲鳴を上げる。

そしてその音とほぼ同時、背後からも可愛らしい声が響いた。

「おじさん！ 用事がすむまで、ノーラ……ちゃん？ と遊んでてもいい？」

一度聞いただけで自信がなかったのか、俺の名前を確認する様にそんな提案をする妹さん。

同年代という事で気に入られてしまったのか。

コニーさんは少し悩むと、あまり遠くへ行かないという事を条件に許可を出してくれた。

少し悩んだのは恐らく、あの道化師のことについてだろう。

襲われた村から遠く離れたとはいえ、俺達の命を奪おうとした奴、この世のどこかに生きているという事だけでも不安になるのは当然だ。

むしろそこまで心配してくれているのが、少し嬉しかった。

「念の為だ、こいつを持ってけ」

コニーさんはそう言って俺の方へと近付き、何かを俺の首へと掛ける。

そして踵を返すと、再び木材の悲鳴を響かせながら上階へと向かって行った。

そんな姿を見送り、首元にぶら下がるものを右手ですくい上げると、それは淡い青緑に煌く小さな石であった。

一体何に使うものなのであろうか。

糸に通されたそれを捻ると光が反射し、一層の輝きを放った。

「きれいだねえー」

あまり見た事のない美しさに無心になっていると、石を覗き込む様に妹さんが興味を示してきた。

俺は曖昧な返事をする、それをロープの内側へとしまいこむ。

なんだかとても大事なものの様なそんな気がしたから。

妹さんは少し残念そうな顔を浮かべていた。

「で、あんたさっきは家に帰るって言うてたんじゃなかったっけ？」

少しばかりの気まずさを抱いた空気を払拭する様に、お姉さんが妹へと呆れた視線を送る。

「いいじゃん、べつに！　新しい友達なんだから！」

彼女のなかでは俺はもう友達である様だ。

ろくに友達を作れなかった俺にとってはその豪快さがどこか羨ましい。

しかし友達なのはまあいいとして、この二人の名前を聞いていないってのはどうなんだろうか。

自己紹介よりも先に、友達。

小さい子っていうのはやっぱり純粋なのかもしれない。

「あの……二人の名前を聞いてもいいですかね？」

そんな問いにももちろん、と当然の如く答えると、二人は名前を教えてくれた。

「私はアーダ。よろしくね」

最初に自己紹介をしてくれたのはお姉さんの方、アーダさん。差し出された手を遠慮がちに握ってから思う、変に汗とかかいていないだろうか。

元の俺と同じ年くらいの女の子だ、流石に緊張もする。

しかし、アーダさんは特に気にした様子も無く、優しくにつこりと微笑んでくれた。

「じゃあ次は私ね！ 私はリブリー！ リブ、って呼んでね！」

握手の余韻に浸る間もなく、元気な声ではりきるのは妹さんの方、リブリー。

略すほど長い名前でもないけれど、それでもやっぱりリブのほうが呼びやすい。

本人の希望もある事だし、そう呼ばせてもらおう。

しかしこの子、決して悪い子じゃあないんだけど、元気すぎるというか落ち着きがないというか……、あまり俺の得意なタイプではないかもしれない。

まあ、そういう好き嫌いが友達が出来ない原因だったのは自分でもわかっているんだけど。

「えっと、二人ともよろしく」

ちよびつとしみつたれた心持ちになりつつも、二人へと挨拶を返すとアーダさんが何やら含みのある笑みを浮かべた。

「さあ、ノーラちゃんも自己紹介をどうぞ。改めて、自分の口からね」

どうやらこの言い方、結構引っ込み思案でシャイな少女と思われるしまったのかもしれない。

気を遣ってくれている感が随分と漂っているし。

まあ、間違いではないというか九割くらい正解な訳だし、逆に都合がいいのかもしれない。

ここは俺を歓迎してくれた二人の好意に甘えておく、コニーさんにもあまり恥はかかせられないし。

俺は大袈裟に、ゆっくりと息を吸った。

「私はノーラ・ブラントです」

コニーさんの苗字を、そして自分以外の苗字を名乗るのはなんとも気恥ずかしくて、くすぐったかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4533m/>

空白の魔法

2011年9月4日23時17分発行